

質及び取扱方を知り、段段序を追うて、遂に一篇の文章を組み立つるやうにならねばならぬ。

この用意の基礎には、やはりその梁や柱や瓦を選ぶ全體の構成がなくてはならぬ。全體の構成があつて、後はじめて部分が成立する。ここにばらばらの柱や戸や障子があつても、これでは家にならぬ。家になるには全體の構成がなくてはならぬ。この構成により選ばれて、部分は成立する。即ち全體があつて、部分を貫くのでなくては、文は成立しない。部分の結合はあく迄部分の結合であつて、文を構成しない。「意、筆先にあり」といふ語がある。かかれる前に意向の成立せるを言ふのである。かかる態度から、言葉の選擇も行はれる。そこで華語と平語との區別がある。「平語とは言ふべき事を平たく斷るだけの只言ただこと、即ち其の思想の輪廓を示すだけで別に趣味風致の添はぬものをいふ。華語とは思想を指し示すと共に、其の由來音調等に特別の趣致の伴ふ華かな語を云ふ」のである。意の展開による語は華語である。その組織に十分の位置を占めてゐる。平語とは趣味風致の添はぬもの、即ち語の背後に意なく、平板であつて、風致なきものである。言葉はもともと多義であつて、成立的に確定不動の語はない。言葉は語らんとする意につれて動くものである。恆存的にあるものでなくて、成るものである。その時、その時に、志によつて成るものである。たとへば如何なる時にも、常に美しい色といふものはない。また恆久的に醜い色

もない。美しくも成立し、醜くも成立するのが色である。枯草にも美しさがある。食べ物は美しい。しかし食卓からおちた食べ物程、きたないものもない。故に華語と平語とは恆久的に分立してゐるものでなくて、その時その時に、座に應じて華語ともなり、また平語ともなるものである。故に

「梅雨が毎日降つて徒然とだざんだ」といふより「五月雨つれづれと降り暮らして」といふ方優しみがある。……而して種種の詞態を用ゐて文をあやなすには、先づ華語を用ゐて個個の分子に興味あらしめねばならぬ。

との言ひ方は、誤解のおそれがある。華語を定立せるものと見る風にとれ、これでは所謂美辭麗句を並べて行けば、自然によい文章になるといふ方へ方と混する傾がある。常に語に先行する表現の意向、視考の存立を考へなくてはならぬ。

二

詞姿の原理八種。

表

裏

一、結體の原理

二、臙化の原理

- 三、増義の原理
- 四、存餘の原理
- 五、融會の原理
- 六、奇警の原理
- 七、順感の原理
- 八、變性の原理

第一結體の原理。又固めの原理ともいふ。抽象的の事を具體的にし、空漠捕捉し難き事物に形を與へて固めて見せるといふ意である。

第二臚化の原理。又ぼかしの原理ともいふ。鋭く人の感を惹き或は感情を害する傾ある事物を和らげぼかして臚ろにする意味である。

蓋し結體の原理は空空如として當ての附かぬ事を具體的に現はすもの、臚化の原理は結體し過ぎる事物をぼかし、薄くし、煮のべ、水を和つて口當りよく、心觸りよくするものである。而して其の方法は有形を無形によそへ、濃きを薄くし、感覺上の事をば高級の感覺に寄せて寫すにある。

かくの如く、第一原理と第二原理とは相反する方向をとつてゐる。第一原理も重要であり、第二原理も重要であるのは、少し變である。原理として定立する以上、その原理の満ざる程、その度に從つてその文はよく、その原理の満されざる程、その度に從つてその文は悪くなくてはならぬ。第一原理の高まる程、文章がよいならば、第二原理の高まる程、文章は悪くなくてはならぬ。然るに第二原理も高まる程文章がよいのである。かくてはこの文の原理性は薄弱である。ここに

於いて第一原理の使用と、第二原理の使用とは場合を區別しなくてはならぬ。されば使用せらるべき原理の判断が必要である。如何なる場合にもこの原理を使ふべきではなくて、或る場合に限つてその原理を使ふべきである。然らばこの原理は究竟の原理ではない。この上位に原理が立てられなくてはならぬ。ここに於いて更に高次の原理が豫想せられる。

第三増義の原理。又ふやしの原理とも云ふ。言表する主體に關係ある事物を附加して其の意義を豊富にする謂ひである。意義だけを傳ふるには加へずとも別に差支なき、されども加ふるのが相應しく、又加ふれば一段と品高く面白く、會得し易くなることを添ふるが此の原理の要求する處である。

この例として、「三尺の刀」といふのを、「三尺の秋の霜」といふのがあげてある。しかしこの例によつて考へると、「刀」を「秋の霜」といふのは、「刀」をもつと感覺的に言つたものとするれば、これは結體の原理にあたり、「刀」といふ言ひ方はあまりに殺伐だから之を「秋の霜」といつたものとするれば、これは臚化の原理にあたる。何れにしても増義の原理は、結體乃至は臚化の原理と全然正反對の原理でなくて、之と立場を異にして、他の方向から見たものと考へられる。また他の例として、「將に亡びむとせる時なりき」を、「やがて爆發すべき噴火口の上に跳れるなり」といふのは、これを感覺的具體的に明確にせるものであつて、結體の原理にあたるのである。結體

の例としては、

家も持たぬ。——道傍の地藏堂の床下に夜を明かす。

所帯染みてきた。——役所の歸りに鮭を二切竹の皮に包んで提げて来る氣になる。

等があげてある。これは具體的に言つたといふ點ではたしかに結體の原理であるが、主體に關係あるものを附加して意義を豊富にするといふ意味にも合ふのであるから、増義の原理にもあたるのである。随つて結體の原理或は臙化の原理を原理として立てれば、この増義の原理はその一方法として提示さるべきものである。増義によりて結體をも臙化をも確實にすることが出来るからである。

第四存餘の原理。又あましの原理、取置の原理とも云ふ。言ふべきだけの事を言ひ盡さず一部を省いて讀者の想像に補はすといふ意味、即ち想像の餘地を存しておくといふことである。

然らばこれ臙化の原理と相近いものである。和らげばかして臙にするとは、その臙にしたるものを、讀者をして想像によつて補はしむることの意味であつて、この働によつて臙化の原理も成立するのである。反對に臙化するとは存餘することである。かくてこれも前の臙化の原理中にふくまるるものと見るべきである。

第五融會の原理。讀者の心の裡に入りやすく言ひ表すといふ意味。即ち已知より未知に、近きより遠きに言ひ及ぼし、我が趣意が讀者の心に融け込んで易易と會得せらるる様にするの意である。

心の裡に入りやすく言ひ表すといふ立場からみれば、結體増義の原理も、臙化存餘の原理も同一である。心裡に入りやすきを目當にすることは、他の諸原理も同一であつて、ただその方法を結體或は増義にとるか、臙化或は存餘にとるかである。もしこの原理を一つとれば、他の一切はこれに含まるるとも見られ、他の原理を立てればこの原理はすべてに態度としてふくまるるものとも見られる。その例の「天下を平かにせむと欲するものは先づ身を修む」は、「天下を平かにせむと欲する者は先づ國を治む、國を治めんと欲する者は先づ家を齊ふ、家を齊へむと欲する者は先づ身を修む、故に修身は平天下の本なり」であり、かくの如きは、むしろ増義の原理にあたるものではあるまいか。ただ「密に組合ひたる語、滑らかに目安く移り行く立言は、吾等の心性の聞くを好み讀むを喜ぶ所、従つて斯様な文に接すれば、所謂心ゆく思がする。融會の原理はその心に基きて存するもの」とされてゐる處から見れば、これは主として文の調子に關するやうである。結體とか増義とか言へば文の意味の問題であるが、これは形體の問題となつてくる。しかし「已知より未知に、近きより遠きに」の如き立言によれば、調子でなくて意味に關するものと見

られるのである。

第六奇警の原理。言奇にして人を警する意、思ひもかけぬ立言によりて人を驚かし荒膽を抜くをいふ。

これは「融會の原理の反対」で、「一旦は驚かしながら、……不道理らしいが鋭く眞理を穿つて居ると悟らしむる」ものである。融會するのでなくて驚倒せしむるのであるから、その關係は正反對である。この點からみれば意味に關するものである。而して是迄の五原理は何れも、心理順應であつたのに對して、これは第一步で心理激發である。故に融會の原理を以つて前五原理の代表とみれば、この原理はこれと相對する一原理と見得るのである。

第七順感の原理。人の感情に順應するの意、其の言ふ所が口調よく、見よく考へよく感じよく、言ひ換ふれば、肌ざはりよく、口づきよく、目ざはりよく、心ざはりよくして、人の感官感情を滑かに動かすやうにするをいふ。

而してこれは主として調子の上の融會であるが、融會の原理にも既にこの意味があつたから、之にふくましめることが出来る。

第八變性の原理。本來人の感情に逆らふものでも用ゐる様により、用ゐらるる場合によつて、其の性を變じて順なるものとなるといふこと、手短にいへば醜なる要素も場合によつて美となるといふ原理である。

然らばこれ奇警の原理と同一である。かくて第七、第八の順感及び變性の原理は、第五、第六の

融會及び奇警の原理と重ねられる。故に心理に對する順逆の立場から之を見る時は、八原理は

融會（順感、結體、臙化、増義、存餘）

奇警（變性）

の二系統となる。もし表現の明臙から言ふならば、

明（結體、増義、融會、奇警、順感、變性）

臙（臙化、存餘）

の二系統になる。

以上八種の詞態原理、之を約して客觀的にいへば、寫す所の事物思想の異なるに従つてそれぞれ相應なる文なし方を用ゐるといふに歸し、主觀的にいへば、人の性情心理の働き具合をみて之れに投合一致せしむるといふに歸する。

この中「相應」といふ概念は輪郭的で、明晰ではない。隨つて如何に相應させるかについては、性情心理に投合一致せしむるといふことになり、その心理的投合性を如何にするかといへば、融會か奇警か、或は明か臙かの二方向をとるのである。かくて、

無形の事に形體を賦與して現實ありありと見たいと思ふが吾等の心性の傾向、而してこの傾向に基礎を置くものが結體の原理である。但し感を惹くことの激しきものは、人其の結體具現するを欲せずして寧ろ其の稀薄化せられむことを欲する。此の心傾向に

基礎を置くものが臚化の原理である。

事物の相應はしく美はしい裝飾に纏はれて言ひ現さるることを欲する。此の慾望に應ずるものが増義の原理である。想像を以つて容易に補填し得ることは寧ろ言はずに省かるるを喜ぶ。此の偏向に基礎を置くものが存餘の原理である。

己が心組織の中に入り易き語を以て會得し易く書かれた文を見ることを欲する。此の慾望に應ずるものが融會の原理である。同時に一見奇怪、熟考して後に眞義を知り得る底の齒應へある文をも喜ぶ。此の性に應ずるものが奇警の原理である。

目耳心にあたりよき語及び敘述を喜ぶ。此の性に應ずるものが順感の原理である。

本來感情を害すべき事物も、特殊の事情の下には却つて文の情趣を助けて快感を與ふる、此の特殊の事情に基礎を置くものが變性の原理である。

として、各原理の心理的適應性の特色を明かにしてゐる。しかし各原理が必ずしも獨立せるものでないことを言ひ、詞態の中には一原理に屬するものもあり、或は數原理に兼ね屬するものもあるとしてゐる。例へば譬喩法の如きは、

無形の事理に形を與ふる點より見れば結體の原理に屬し、

當の事柄を隠して譬喩のみを掲ぐる場合についていへば、明かに臚化の原理、時に存餘の原理に屬し、

當の事柄以外に喩義を加ふる點より見れば増義の原理に屬し、

手近さ譬喩によつて難解の義理を會得し易からしむる點より見れば融會の原理に屬し、

奇想天外の妙喩を引く場合につきて云へば奇警の原理に屬し、

調子よく譬喩によつて心情を氣持よく動かす點について云へば順感の原理に屬し、

特別の必要ありて醜穢なる譬喩を用ゐる場合には變性の原理に屬する。

かくの如くして、一つの詞態が數原理に兼ね屬することは、この原理がそれぞれ獨立性を有せずして、存立が不明確なるに基くのである。ここに於いてこの八原理を

一、表現の志向に遡ること。

二、系統分類を整理すること。

によつて、八原理分立の要求を更に完成することが出来るのである。

三

文の形はさういふ形で存在するからよいのではない。さういふ中にそれが表れてゐるからよいのである。もともと心理現象の特色は、或るものに關する點である。何者にも關せざる意識はない。必ず何者にか關係した意識である。即ち意識は常にある對象に關係してゐること、意識は常

に對象に指し向けられてゐること、即ち對象に對して態度をとつてゐること。故に意識と對象とは連結した形で現れてゐる。意識と連結しない對象はなく、對象と連結しない意識もない。兩者は相關的に同時に與へられてゐる。随つて意識が對象を産出するのでもなく、對象が意識を産出するのでもない。しかし意識はそれ自身發動的であるから、その形は著しく對象の方に傾いてゐる。これが意向である。意識と言葉は相互關係にあらはれ、言葉が意識を産出するのでもなく、意識が言葉を産出するのでもない。言葉は意識と共にあることによつて成立し、この場合意識は言葉についての意識である。意識は言葉の方に向つて傾いてゐる。故に言葉の働を考へるには、この意向を考へなくてはならぬ。意向が言葉に向つて傾いてゐる状態を見なくてはならぬ。されば言葉を意向から取り離して、言葉だけを考へるのは無意味である。言葉をきくのは、言葉を聞くのでなくて、語らんとする意向をきくのである。故に同じ言葉でも、語る意向によつて、異つた言葉となるのである。語彙は自ら意味を持つよりも、意向によつて意味を持つのである。語彙に向つて傾いた意向を聞くのである。修辭の問題も意向の傾きに於いてみなくてはならぬ。言葉の意味を決定するものは、語彙ではない。語彙に向つて傾いた意向である。表現はそこにある言葉を意向に連結させる時に成立する。言葉は存在するからよい譯ではない。意向の中に成育するから

よいのである。成立したものを見るのでなくて、意向の中に成立するものを見るのである。描く働が視る働に連結するとは、視る働の中に傾いた意向が、言葉に連結するのであつて、描と視とを連ぬるもの、即ち「視—描」の連絡線は意向である。しかも意向は視の終りになつてはじめて發生したのではなくて、視の中から傾いてゐた傾向である。骨組とはこの全體の傾斜である。この視軸の問題は、その個人の視傾向に連り、個人の視傾向の背後には、その國の文化の視軸がある。

而して我國の視軸は、分析的に細視する方向に進まずして、ある濕度をとほしてみるやうな、うす暗い方向に向つて進んでゐる。日本の美術工藝はやや暗い光線の中でみるべきもので、明光の中で見るのには適しない。小島政二郎氏は「感情山脈」で

「昔の人は、日の光さへ直接に庭へさしたり、縁側へ當つたりさせることを嫌つたんだね。日の光の美しささへ、間接の、いつでも陰を伴つた美しさにして味はないと承知しなかつたんだね。」

「だつて、あの山茶花に眞面に日が當つたところを想像するよりも、うしろの塀に當つてゐる日の光の柔かな明るさの前に浮んでゐるの花の方が、ずっと綺麗ですものね。」

といふ會話をさせてゐる。言葉でも同様であつた。言葉を論理的に明晰にするよりも、言葉をやや薄暗い状態の中に置くことが好まれた。古くから日本の言葉には主語が平氣で省略された。例へば「竹取物語」でも「源氏物語」でも皆さうだ。今日の口語でも主語は平氣で省略される。また言葉の中で、意向の傾を直接に示すものは、助詞であるが、助詞は分類が繁雜すぎる程に繁雜多義で、意味を適確に決定し難い。これは助詞ばかりでなくて、他の語彙にもこの幅が多い。文の構成の上にも、或はまた語彙の上にも、未決定的な暗さを持つてゐる。

明光の中から一步後退して、薄暗の中に立つことによつて、言葉はかへつて生き生きとして來る。かういふことを言葉を餘情的に活かすとか、餘韻を残すとか言ふのであるが、餘情とか餘韻とかいふものは、言葉が濕度的に表現されて居る文章なので、これを明光的な表現の形にかへることが困難である。また強いて代へてみた處が、そこには明光的表現に代へきれぬ者がある。この剩餘を餘情とか餘韻とか言ふのである。畫面に餘白があり、明光的表現の形では一つの空白であるにも係らず、すべての表現を基礎づけ支持してゐる。その畫面の餘白と相通するものである。主語の省略をはじめ言葉の一般省略、助詞の幅をはじめ言葉の一般的不決定は、わが國語の中心的性質である。(小著、表現の日本の特性)

かくの如くであるから、吾等の修辭學は、自然に此の吾等の視軸を考へてなくてはならぬ。

第二に考ふべきは、ここに指示された八種の原理の内部關係であるが、これは八種が嚴然とし

て並立する爲には、原理の意味がやや混雜し、又錯綜もしてゐるので、これを二つの方向から整理することが出來た。即ち心理的順應性の立場からは、融會と奇警の二系統となり、表現の明暗の上からは、明と臆との二系統となつた。然るに奇警の原理は文の全範圍から見ると、その品格からいつても、傾向の自然からいつても、極めて一少部分を占むるのみで、文の全分野は融會の原理の方にある。奇警は文の奇道であつて、決して常道ではない。文の常道は人を驚かす處にはなくて、人と融合する處にある。故に奇道の原理を除去する時は、

融會(順感、結體、臆化、増義、存餘)

の六原理となり、前述の理由によつて、融會と順感とは一致し、増義は不明の原理であり、臆化と存餘とは一致するが故に、

融會、結體、臆化

の三原理となる。而して融會は増義を通して結體と一致するが故に、結局は

結體、臆化

の二原理中に、八原理すべてが還元せらるることになる。然らば修辭の問題は、之を我國の視軸傾向の問題に結合すれば、表現の明暗の二系統になる。かくて我が國の意向の傾斜と、八原理の

内面的關係とはここに歸一することが出来る。即ち表現の明光性と薄明性との二つである。

もし結體を論理的自然により明瞭を欲するもの、増義を同じく附加によりて明瞭を欲するものとすれば、ここに第一原理乃至第四原理によつて、明晰の論理性とその裏たる不明晰の論理性を得る。次に融會を心理的自然により明晰を欲するもの、順感を同じく順應により明晰を欲するものとすれば、ここに第五乃至第八原理によつて、明晰の心理性とその裏としての明晰の變質心理性を得る。

論理的明晰性 結體、増義

論理的不明晰性 臚化、存餘

心理的明晰性 融會、順感

變質心理的明晰性 奇聲、變性

となる。この時論理性心理性の差違を撤廢すれば、結局ここにまた明暗の二系統となり、前分類とその結果に於いて一致する。

然らばこの二方向よりしては如何にして日本的修辭學を成立さすべきであるか。吾が國の視軸の性質よりして、吾が國語の表現は、明光的方向をとることはむしろ不本意であつて、自然に薄

明的方向に向つてゐる。かかる視軸の自然的傾斜によつて、わが修辭學は、明光的に明確精緻を目的とせずして、一步も二歩も後退して、省略と未決定による餘情的象徴的方向が採られてゐる。かかる寡黙に向ふ鍛鍊の傾向は、言葉の自らなる性情であり、この性情の上にわが修辭は成立する。故に「新文章講話」の文章修辭論は、これをその意向に還元し、更にこれを内部關係によつて還元する時は、自らなる二方向を得、ここに日本的修辭學の方向を定立し得るのである。かくて日本の修辭學は象徴性の問題を持つてくる。

四

象徴は、表現せんとするものと、表現せられたるものとの不適合によつて生ずる。表現せんとするものは、意向である。表現せられたるものは、表現である。而して表現には二つの姿がある。第一は表現の文字或は言葉の形である。第二は表現の材質の形である。この二つについて、それぞれ象徴の問題がある。

意向のない表現は、表現のない意向と共に、不完備なる形成である。意向が表現になつて、はじめて形成が充實する。しかしこの進行は決してなだらかではない。特に日本の表現の進行過程

には一つの特質がある。意向と表現とが釣合ふのが、最も考へやすい形であり、この形になるのが、表現の完成であるかのやうに考へやすい。しかしかかる完全なる釣合は、事實上は望まれもせず、また望み得られもしない。文學の表現には、必ずその前に表現を求むるもの、即ち意向がある。意向と言葉とは必ずしも一致しない。一つの意向に對して一つの言葉があるなら、言葉と意向とは一致する。しかし意向は無限である。その無限の意向に對して、一一の言葉を用意することは、不可能である。新らしい意向の生ずる度に、新らしい言葉が作られては、言葉の類も増大し、その到る處において増大する言葉を理解し合ふことも出来る譯にはいかない。随つて言葉を一定して置いて、それで無限の意向に適合させなくてはならぬ。言葉は自分の形を保ちながら、その場所場所で、意向に適合しなくてはならぬ。ここに於いて、言葉と意向との關係は、ある程度まで適合し、ある程度以上は不適合であることをまぬがれ得ない。言葉と意向とはかくゆるい結合をしてゐるにも係らず、かかる結合を重ねてゐる間に、言葉はあの意向ともこの意向とも結合して、其れぞれの場合の成形痕跡を表現面下に残留し、ここに言葉の多義を生ずる。

言葉の中で、最も一語一義的なるべきものは、名詞である。名詞は一つの言葉が一つの物を表

すべきであり、松は松だけを表し、決して紅葉を表すべきではない。松は松なると共に紅葉をあらはしては、表現面に混亂を生じ、意向と釣合ふことが出来ない。故に最も一語一義なるべき要求は、名詞に於いて著しい。しかし一語一義としてはじまつた名詞も、意向との接合を重ねると共に、自然に表現力を複雑にして來、物の外に、性質、作用、關係をも現して來る。「大日本國語辭典」をみると、「松」は第一に「松杉科、松屬の植物の總稱」となつてゐ、これが「松」本來の一語一義のものであるが、第二には「松茸をいふ、宮女の詞」となつて、茸の表現に接合し、第三には「紋所の名。松の幹、枝、葉又は松毬まつかさに象りたるもの」となり、第四には「松明の略」となり、第五には「松飾の略」となり、第六には「松の位の略」となつてゐる。この「松の位」は、もと松に太夫の位を授けたる支那の秦の始皇の故事よりいで、三位の官人の異稱であり、また遊女の太夫職の異名となり、決して一言一義で終らない。しかもその松が植物の松の表現であると共に、操或は賀の如き永續を希ふものに對して、その永續を象徴する性質をも持つてゐる。松の操となり、高砂の松のめでたさとなれるが如くである。かくて本來の一義を持続しつつ、表現の機會にふれて、名詞さへも多義の方向をとつて行く。

紅葉に到つては、それが一層著しい。

- 一、もみづること紅葉すること。黄葉になること。
- 二、槭樹科、槭樹屬の落葉喬木。
- 三、紋所の名。楓樹に象りたるもの。
- 四、紅葉葉もみぢばの略。
- 五、襲の色目の名。
- 六、麥のふすま。
- 七、少女などの羞ぢらひて顔を赤むるにいふ語。
- 八、小兒の手のやさしきさまにいふ語。
- 九、鹿の肉。
- 十、魚の鰭の名所。
- 十一、茶を立つるにいふ語。紅葉の音讀こうえふを、濃う善うに通はしていふ洒落。

かくの如く名詞がその物の性質、作用、關係等をも現すに到つて、多義になる。この時言葉はその表現の時時に、一義を示しつつ、しかも他の多義を未表現の或る者としてその表現面下に保持

してゐる。故に言葉の中心として重きをなすものは一語一義の本來のものであるが、この保持性、方向性と共に、その働の歴史の中で得來つた多義があつて、これが言葉の變化性、多方向性をなしてゐる。しかしこの多義性はもとより、一義性によつて貫かれて居る。ここに言葉の定形がある。

かかる多義は、助詞の如き關係的に定立する言葉に於いて、一層著しい。例へば、「も」は、同じく「大日本國語辭典」に、

- 一、同じさまなる物事を並べ言ふ時、用ふる語。
- 二、さへ、すらの意を表はす語。「見ることも出来ぬ。」
- 三、「と」の意を表はす語。「見たも同じこと。」
- 四、「とも」、「なりとも」、「にても」、「とて」、「とても」等の意を表はす語。「一錢も持たぬ」「遅くも間に合ふ。」
- 五、意味を強め、又、語調を整ふるに用ふる語。「高いも高く。」

の五義をあげてゐる。「も」の一語一義の本來性からいへば、一の並列の意である。「山も川も

皆白くなつた」の如き「も」であるが、之が更に進行を進めて高まると、二の並列進行になる。「さへ」「すら」の如く増加の意味になる。一の強度化せるものである。その強度を一層進めると、四の「一錢も持たぬ」の如き限定度の高い意味になる。それはすぐに五になる。そこで「も」は、

一、並列。一。

二、並列強化。二↓四↓五。

の二方向になる。並列の意味の變化は、強化の方向をとつて進み、いつか並列の意味はなくなるが、しかし並列の意味がこの根柢にあつて、この並列に比較され、そしてその強度もなされて居る。その強度化はいつも並列の方向に拘束されてゐて、思ふままには進み得ないのである。この傾向が「も」の助詞以外の場合にも常にあらはれて、

副詞の「も」。「もはや」、「もう」。「も、かう参りまする」

助動詞の「も」。「む（助動詞）をいふ。古い東國の方言。「吾が手觸れなな 土に落ちもかも」

感嘆詞の「も」。「まあ」、「よ」。「うれたくも鳴くなる鳥か」

接頭語の「も」。「此の上」、「更に」、「また」、「いま」。「も一度」

の如く、何れも並列を基礎とする強化の方向に向つてゐる。ここに「も」の變化性がある。

然るに先の「も」の意味中、「と」の意をあらはすといふその「と」であるが、同じく「大日本國語辭典」には、八義をあげてゐる。

- 一、それと指定する意を表はす語。「二日といふ夜」
- 二、「として」の意を表はす語。「にきたづに船乗りせむと月待てば」
- 三、「の如く」の意を表はす語。「白雲のこなたかなたに立ち別かれ心をぬさとしだく旅かな」
- 四、「其の上に」、「又」などの意を表はす語。「いきといきて立ちかへらんも心苦し」
- 五、「いへども」の意をあらはす語。「嵐のみ吹くめる宿に花すすき穂に出でたりと甲斐やなからん」
- 六、同じ種類の語句を接続するに用ふる語。「行く水とすぐる齡と散る花と」
- 七、「共に」の意を表はす語。「妹と登れば」
- 八、「あのやう」、「そのやう」、「ああ」、「あれ」。多くは下に「かく」といふ語をおき相對して用ふる語。「とやかくと」

以上の八義はその基本的意味としては、一の指定の方向であるが、この指定が連接並列に向けば、

六、七になり、更に指定より離脱する方向をとつて類似の方向、即ち消極的方向に向けば、「の如くに」の三、八となり、増加の方向に向つて離脱すれば、「其の上に」の四となり、量的でなく質的論理的に離脱すれば、「いへども」の五となる。かくて「と」は、

一、指定。一↓二。

二、並列。六、七。

三、指定より離脱。三、四、五、八。

(消極的方向。三、八。)

(積極的方向。四。)

(否定的方向。五。)

の三つの方向をとるが、ここにも依然として指定を中心とし、その許さるる範囲に於いてのみ、他の場合が生ずる。

而して並列を中心とする「も」が、指定を中心とする「と」と結合すると共に、意味を一層複雑にしてくることは、言ふ迄もない。かくの如く意向の無限に釣合ふために、言葉は語数を増加

するよりも、意味を複雑にし、且他語との連結によつて、これに應じてゐる。随つて言葉を語る働、解く働は、多義を限定して、一義たらしめることによつて成立する。言葉は變化の方向によつて、基本傾向から離れて行くからである。しかもかかる變化の方向の基底には、一定的方向があつて、變化の方向を貫き、その貫く系列によつて、否定の姿で、あらはれたものを支持してゐる。あらはれたもの一つを、あらはれざるものが支持してゐる。ここにも現れたものと、現れざるものとの兩者の間に、この不適合がある。かくて言葉の一義と多義との間には、象徴が成立する。しかもこの兩者を連結せしむるものは、言葉本來の基本性であつて、この連結點を、象徴點といふ。而してこの象徴點が言葉の座である。言葉の全體的なるものを、この點に於いて個體化するからである。

今「と」の多義中、假に五の「いへども」の意を表現面に出し、他を表現面下に沈めたとして、現れてゐるは一義、隠れてゐるは七義、しかもこの七義と雖も、現れてゐる一義に對して無力なのではない。この一義は七義から支へられてゐる。その支へ方は、指定を中心とした同一方向、基本方向の上に成立してゐる。五と五以外の七義とは表出的に不適合であるが、しかもこの不適合を貫いてゐる基本方向においては適合的である。而してこの基本方向が一から八迄の間を通過

すると考へると、それは五の上をも通過する。この點が象徴點である。象徴點が連結點であるといふ意味は、この基本方向線の上を、意義がすべつて、それぞれの多義を連結するからである。随つて象徴の成立には、三つの要素が必要である。第一は言葉の多義、第二は多義を貫く基本方向線、第三はこの基本方向線によつて生じた連結點、即ち象徴點である。故に象徴とは不適合の適合である。

五

吾等の意向は、常に表現を求めてゐる。去年冬信州に旅行して、友の歸つたあとの夜おそく、炬燵でその町の地誌を讀んでゐた。外は可成りの雪降りで、炬燵でかういふものを讀んでゐるのは樂しかつた。その中で名勝地の表現には、大概眺望絶佳としてある。信州の如く地狭く、谷低く、眺望のきかない地では、眼を放つて遠く眺めることが抑壓されてゐ、さてこそ人人の心の中には眺望を希ふ傾多く、この意向を満すものが、名勝である。ここに關東の如き平原地には見られない眺望絶佳を願としてゐる心持がある。

意向は常に表現に向つて進み、表現の中にあつて一層確實となり、一層緻密となり、一層展開する。表現を通して、表現を終つて、はじめて意向は完成する。意向が意向たる爲には、表現たらねばならぬ。今意向が言葉になる場合を考へるに、言葉の表現が既に象徴的である。その上に意向と言葉との關係が、第二に象徴的である。

意向がそのまま完全なる釣合を持つ表現で、言葉になるとすれば、意向と表現との間には完全なる一致があつて、象徴はない。しかしそれは言葉自身の性質からも不可能であるが、更に意向が言葉になる働の上でも不可能である。意向自身はいくらでも精確になり、緻密になるが、言葉はそれに及ばない。言葉の精密度は、はるかに意向の精密度には及ばない。この精密度の相違を防ぐには、其の表現にあつて、言葉の多義によつて生ずる茫漠により、之を覆ふ外ない。精密なる意向に對するものは、言葉の多義なる幅である。多義は限定の後、表現面下に隠れて傾向的に働くからである。

かくて意向は順次に言葉になつて行くが、しかし言葉になりきれぬ意向の部分がある。この意

向の餘剰部分が表現には重要な性質をなしてゐる。この餘剰性意向は、決して單なる殘餘でもなく、また單なる殘滓でもない。この餘剰は言葉の多義の餘剰に近い性質があるので、兩者の餘剰は結合して、意向と表現との中間位者として存する。しかも言葉は、自己の精密度の稀薄を、この中間餘剰によつて助けられる。表現の餘情、或は餘韻と稱せらるるものは、この中間餘剰である。中間餘剰の層と表現の面とで、表現は成立し、これが意向と釣合つて、表現は充實する。表現された意向の部分と言葉とは相應じ、表現餘剰の意向と、表現餘剰の言葉の意義とが相應する。

中間餘剰とは換言すれば表現面下の未表現部である。即ち第一は言葉の多義性に基く餘剰である。第二は意向の複雑性に基く餘剰である。されば中間餘剰とは意向と言葉との精密度の相違から來る表現餘剰である。しかも意向性餘剰は言語性餘剰によつて支持せられ、意向性表現は言語性表現によつて支持せられる。而して言語性餘剰はまた意向性餘剰と結合して、之を支持する。かかる二系統の連關は、この兩者間にある基本方向線によつて貫かれる。即ち餘剰兩者の連關と同様に表現兩者の連關が、この基本方向線によつて貫かれる。ここに於いて、はじめ意向と表現との中間にあらはれた餘剰は、完全に意向と表現との中間位者として成立し、ここに中間餘剰が

成立する。かくてこの中間餘剰と表現との連關點、即ち象徴點が、ここに於いても中間餘剰の表現點として重要にあらはれて來る。

「萬葉集」の「中大兄三山の歌」は、二つの確定と二つの推定とからなつてゐて、

香久山は 畝火を愛しと 耳梨と相争ひき 神代より斯くなるらし 古昔も 然なれこそ
現身も 孀を 争ふらしき

と、天智天皇が皇太弟の大海人皇子と額田王とを、争はれることの苦しきをおほせられてゐる。「相争ひき」「斯くなるらし」「然なれこそ」の三句の終にくる深い沈黙があつて、それは表現面にはあらはれないが、中間餘剰として、表現面の下から匂つてゐる。故に之を書き改めて、

香山久は 畝火を愛しと 耳梨と 相争ひき
神代より 斯くなるらし
古昔も 然なれこそ
現身も 孀を 争ふらしき

とすれば、その御心持が明かである。

島木赤彦先生の歌に、

焼け跡に霜ふるころとなりけり心に沁みて澄む空のいろ

がある。これは大正十二年東京震災の後である。「焼け跡に白白と朝は霜をみる時になった。空は心に沁みて澄んでゐる。この澄める空の下に、震災の劫火に滅びはてた町町があり、その町の上には朝毎に霜をみるのである。焼け跡とその霜は心に沁み、澄む空の色も心に沁みる。この二つの形體がまた『霜ふるころとなりけり』の次にくる空白によつて成立する」(小著 東洋美學)のである。この中間餘剰が、ここから感じられて、全體を統一してゐる。この場合の象徴點は、この中間餘剰である。故に寫したことが重いのでなくて、寫さうとしたことが重いのである。

この中間餘剰は、文學表現の場合にはかり重せられるのではなく、他の場合にも同様に重せられてゐる。これが「構」^{かまへ}である。構はもとより意向ではない。また表現でもない。中間位者即ち座である。宮本武藏の「兵法三十五箇條」にも、「太刀取様之事」が第三條に出てゐる。

太刀の取様は、大指、人さし指を浮けて、たけたか、中、くすりゆびと小指をしめて持候也。太刀にも手にも、生死と云事有り。構る時請る時留る時などに、切る事を忘れて居付手、是れ死ぬる手と云也。生と死は、いつとなく太刀も手も出合やすく、固まらずして切り能き様に安らかなるを、是れ生くる手と云也。手頭はからむ事なく、臂は伸び過ぎず、屈がみ過ぎず、腕の上筋弱く、下筋強く持也。能能吟味あるべし。

と言つてゐる。この意は惟ふに、「太刀の取様は、大指、人差指をかるく浮け、丈高指は中位、薬指と小指をしめて持つのである。太刀にも手にも生死といふことがある。構へる時、受ける時、留る時などに、切る事を忘れて居付く手は、是れを死ぬる手といふのである。いつとなく太刀も手も出合やすく、かたまらないで切り能いやうに安らかなのが生くる手である。手くびはからまらず、肱は伸び過ぎず、かがみ過ぎず、腕の上の筋を弱くし、下の筋を強くして持つのである。よく吟味せられよ」といふのである。手の屈筋と伸筋とを同時に緊張しては、すべてが表現面になる。一方を弱く一方を強くすれば、この構では次の切り込みの運動に何時でもかかることが出来る。全體が次の表現に向つて傾いてゐる。かういふ中間餘剰的な位置が、構の體位を規定してゐる。足、目、心持等の何れに對しても同様である。かかる中間餘剰の多い形體がすべての我國の文化には共通してゐる。能樂、武道、作法、茶の湯、文學、繪畫、建築、庭園その他一切に

この形の象徴性がある。故に我が國の文化一般が特に象徴的だと言はるる所以である。

六

以上の考究は、表現の形に於ける象徴であつて、この意味の象徴は何れの文化にも共通してゐる。ただ吾が文化はこの方向に最も著しい點が注意されてゐるのである。而して第二の象徴は、表現せられたる素材の性質と意向との間の不一致關係によるものである。換言すれば象徴を表現面の材質と意向との精密度の比較に求むる方向である。これがむしろ一般的に象徴として考へらるるものである。

精密度の低い例として結婚の祝に鶴龜を出す場合を考へて見る。結婚の祝の意向には、夫及び妻の心理的生理的な様様な特質も考へられ、社會的連關の各側面も考へられ、家系、資産、名望さういふものも考へられる。かかる意向の表現面を龜であるとする、この龜については、頭、甲、足、尾等の龜の形態、それから龜の生態、龜の長壽として傳へらるる傳説、その他が考へられる。それ等の中、龜が結婚の祝に適合するのは、形態や生態ではない。岩の上に日をあびて甲を乾す遲鈍な生活形態などは、結婚の目出度さには全く關係がない。かういふものは表現の剩餘

として表現面下に押し下げられるに相違ない。泥中に尾をひく龜も同様である。足の形、尾の形何れも皆表現餘剰である。この中で表現面に上り、結婚の意向と直接に連關するものは、永續性の問題だけである。傳へらるる龜の長壽が、結婚者の長壽に結合せられ、結婚の幸福の永續の希望が表現せられたのである。この長壽永續の一點だけが、意向と表現との連結點である。前の言葉にあつては、その言葉の基本性、保持性がこの連結點であつたが、この材質の場合では、かかる性質的一致の點が連結點となる。然して、この象徴點が一點だけ明瞭であつて、他の一切が中間餘剰となるものが、低度の象徴である。この象徴にあつては、座は偶然的機械的で甚だ狹少である。

「萬葉集」の歌の分類中に、「寄物陳思」或は「寄物述思」の一體がある。表現面に物を置いて、その物と明かな象徴點を設置することによつて、意向を表現する。これが物によりて思を陳ぶるのである。物は表現面である。思は意向である。表現面に物を現し、その物の持つ象徴點で思が現されるのであるから、象徴點の明白なることが大切である。

肥人の額髮結へる染木綿の染みにし心我忘めや(卷十一)

の歌では、「染む」が象徴点である。肥人は色染の木綿で前髪を結つてゐるが、その染木綿の深く染められた心を、私は忘れられないといふのであつて、肥人も額髪も染木綿も、皆表現の餘剰である。表現は「染む」を象徴点として、「染みにし心我忘めや」に系統がある。しかしもつとはかない象徴点を持つてゐる歌もある。

奈良山の小松が末うれのうれむぞは我が思ふ妹に逢はず止みなむ（卷十二）

奈良山に小松が生えてゐるが、その小松の枝先の末のうれんぞ逢はずに止まれようかの意味で、「うれんぞ」は「どうして」である。この「うれんぞ」を呼びおこすために、「小松が末の」の「末うれ」をもつて來てゐるので、言葉の同意接續である。それ以外には意味がない。實に、偶然的な同音の接續による象徴点の設定である。かういふことは後世の和歌に特に多い、所謂かけ言葉である。かけ言葉は座の設定を偶然的接續に置いたものであつて、かかる例を卷の十一から拾ふと、

念へども念ひもかねつあしひきの山鳥の尾の永きこの夜を

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長き永夜をひとりかも寝む

の如きがあり、これが「ながき」を象徴点とせることは一見して明かである。

卷の十七には「君により吾が名はすでに立田山」云々の歌などもあつて、徳川期の洒落などに見らるる程度の象徴点を示してゐる。

たらちねの母が養かふ蠶この繭こ隠りいぶせくもあるか妹に逢はずて（卷十二）

は、象徴点は「いぶせく」であるが、妹に逢ふことを防げてゐるのが母であるかの感もして、母が完全に中間餘剰とは成り切つて居ない。ここには座が浮動してゐる。

「大學」の性質について、子程子が「大學は孔氏の遺著にして、初學、徳に入るの門なり」といひ、それが朱子の「大學章句」の最初に出てゐて、誰でも知り切つてゐる。そこで

田樂は辛子からしの味噌にして兎角口に入るの損なり。

の如き洒落が出てくる。この兩者間の連結は僅かに音聲間にのみ成立したもので、象徴点の座は甚だ小さい。

この物に對する表現を一層明かにして、意向を表現面から隠してしまへば、「寄物陳思」が、「譬喩歌」になる。

くれなるの濃染こぞらの衣を下に著ば人の見らくににほひ出でむかも（卷十一）

紅に濃く染めた着物を下に着たならば、人に現れて見えるであらうかといふ意味で、この表現面は「紅の濃染の衣を下に着ば」に中心がある。紅の濃染の衣は、自分の熱き戀の心であり、下に着ばは、それを心の中にひそかに持つことである。人に知らるるをおそるのである。表現面は「紅の濃染の衣」になり切つてゐる。象徴點は「人の見らくにほひ出でむかも」に現れてゐる。

河上の洗ふ若菜の流れ来て妹があたりの瀬にこそ寄らめ（卷十一）

の如きも亦同一で、表現面は「流るる若菜」に座の中心がある。象徴點は、「妹があたりの瀬にこそ寄らめ」に現れて来る。

以上の如き低部象徴作用にありては、ほぼ次の如き特色があらはれて来る。

- 一、中間餘剰が大であり、且剥離してゐて、意向と表現との直接連結が甚だ小である。
- 二、故に象徴點は中間餘剰外の位置に結ばれ、表現層から遊離する。
- 三、故に意向と表現とは對立する。ここに象徴度の不充實があらはれる。
- 四、中間餘剰は、意向から來たものも、表現から來たものも、共に多量であるが、しかし何れも性質的に著しい相違があり、連結力は小であつて、一致し難い。随つて中間餘剰は、

表現面と意向との對立を連結することが出来ない。

- 五、ここに於いて象徴點の連結力は、一時的である。そこにあるものは、永久の不一致である。

かかる象徴關係は、象徴度の低度なるにも係らず、かへつて世には廣く行はれてゐる。象徴點だけが細かく強くあらはれ、理解しやすいからである。例へば十千十二支の如きが、その適例である。共に一粒の種子から芽を生じ、生育し、實を結び、再び枯れてもとの實になる迄の一代の連續を、十乃至十二の段階にわけたものである。子は鼠ではなく、丑は牛ではなく、甲はきのえではなく、乙はきのとではない。子は種子、丑は紐で生命が紐の形で種子の中にある形、寅は蟻でうごめく形、生命が動いて眼にみゆる迄に明かになつた形、それから戌はきるで枯死であり、亥は闔で閉ぢること、即ち生命が再びもとの種子の中に閉ぢこもつた形である。また甲は生命が甲の中に閉ぢこめられた形、乙は軋できしること、力が軋つてあらはれはじめたこと、丙は炳で力が明かになつたこと、戊は茂で茂ることである。それから辛は新で新しい次の生命の發生すること、壬は妊で中に新らしき生命が妊まれてゐること、癸は揆で内在する命をはかり得ること

である。かかる座の比喩的設定を、更に比喩的に擴大して行つたものが、十干十二支であつて、低部象徴の様様な生活規範として、廣く世に行はるるに到つたのである。

この比喩象徴を、論理的關係にすれば、

- 一、一部の接合による不確定成立を、全部的接合による確定成立と見る爲に、必然性が無い。
- 二、必然性なきが故に、習慣的知的連結、機械的知的連結となる。
- 三、是に於いて連結を密接にして全部的にすること、即ち象徴點の擴大をなすことが要求される。換言すれば中間餘剩の中點に、象徴點を置くことが要求せられる。

七

低部象徴にあつては、材質の象徴點のみが重せられて、材質の自然的性質は重せられなかつた。

但馬皇女、高市皇子の宮に在せる時、竊に穗積皇子に接ひき。事既にあらはれて御作歌

の詞書があつて、

人言をしげみ言痛みおのが世に
いまだ渡らぬ朝川渡る

の歌が「萬葉集」卷二にある。この中象徴が「いまだ渡らぬ朝川渡る」にあらはれてゐるが、この象徴の意味はよくわからぬ。何かしら禁を破ることらしく取れるが、しかし「人言をしげみ言痛みおのが世に
いまだ渡らぬ」迄は甚だ明白で、自然的意味が十分に語られてゐる。象徴點「朝川」は不明であつても、他にあらはれてゐる自然的意味によつて、この歌は生生した迫力を持つてゐる。自然的意味が、象徴點を覆つて居る。随つて中間餘剩も統一されて、不明なる象徴部分を、そのまま中間餘剩に組み入れてくる。諷刺畫のあるもの、たとへば「鳥獸戲畫」の如きは、當時の佛教を諷刺したらしく、そこに出てくる猿は叡山、蛙は園城寺、鹿は南都の佛教の象徴とみられる。しかし今日作者も不明であり、筆者も一人ではないらしい程で、甚だぼんやりしてゐるが、それで今は諷刺の意味から全く離れてしまつて、純粹の畫として觀られて、何の不便もない。しかしこの爲にはこの畫の自然的性質の豊さが働いてゐるのであつて、これが象徴部分をも覆つてしまつたのである。象徴部分は今日中間餘剩になつてしまつた。

かくの如く自然的性質を盛にすれば、それによつて中間餘剩中、表現面に出られるものは再び出、表現面との關係は整ひ、表現層が澄んでくる。例へば陶器の形體は自ら陶器の文様を形容し

決定する。意向が陶器の自然的性質を決定し、陶器の自然的性質が文様を自ら規定して意向に還へる。どの文様でも陶器に描き得るのは、陶器の形が自然的性質を十分にしているか、乃至は文様が陶器の自然的性質に覆はれてゐないかである。何れにしてもそこから意向にまで徹る必然的なるものがない。表現面と中間餘剰との關係は必然的に一にならなくてはならぬ。所謂美文或は美辭麗句の不成立は、この表現面が、中間餘剰を通して意向に連結しないからである。そしてこの形は象徴點が中間餘剰中に成立せずして、表現面と意向との剝離が現れたことを意味する。随つてこの缺點を除去することは、低部象徴を高部象徴に高むることであり、この傾向は既に低部象徴が要求してゐたものの成立である。

この時の藝術の形は、成立的に言へば中間餘剰的に成立したもので、表現と意向とは中間餘剰層で保たれ、表現の全形が自然的である。

高部象徴の性質。

- 一、表現面と意向との連結が必然的である。
- 二、象徴點は中間餘剰層の中央にあり、移動により他の何れの點にても象徴し得る如く、象

徴力を擴大しなくてはならぬ。

- 三、表現と意向とは一致する。象徴とはもともと、表現と意向との不適合から來たものであるが、中間餘剰層を持つことによつて、兩者は一致する。低部象徴の如き兩者の剝離がない。意向と表現とだけを見れば、依然として兩者は不適合であるが、中間餘剰と象徴點の成立によつて、不適合は全性質でなくて、一部の性質となる。

- 四、中間餘剰は表現を支持し、意向表現の餘剰として、兩者の不適合を示しつつ、その不適合の適合をなしてゐる。故に象徴の成立は、不適合を基礎とする中間餘剰による適合である。中間餘剰は内語である。(小著 言語美學 参照)

- 五、中間餘剰も意向も表現の自然的意味によつて覆はれると、これは既に但馬皇女の歌でみたやうに、象徴點も表現的になつてくる。かくて中間餘剰が低部象徴の場合の如く眠らず、濁らず、表現面的になつて來、表現面は背後から擴大して、意向と釣合ふやうになる。中間餘剰と表現面との密着が、表現と意向との不適合を適合させる。この形で表現と意向とは一致する。

ここに比喩象徴の如き低部象徴では満し得なかつたものを満して來る。

かくの如くして成立した美には、餘白即ち中間餘剩部分が豊富である。例へば、(A、B、h、m)が(A、B)になつた場合には、中間餘剩は(h、m)であり、(h、m)になつた場合には、中間餘剩は(A、B)である。何れも餘剩の大なる形である。故に象徴點は中間餘剩層の何れとも自由に連結し、餘剩層の表現支持力を活潑にしなくてはならぬ。表現面にあらはれて居ないものが、特に表現上に重きをなすのであり、この美が寂寞の美である。故に寂寞の美とは言をかへて言へば、中間餘剩層の象徴點化の大なるを言ふものである。寂寞の美とは

1、中間餘剩層の大。

2、中間餘剩層と象徴點との連結の大。

との二つの性質からあらはれて居るのである。

但馬皇女、高市皇子の宮に在せる時、稹積皇子を思ふ歌

秋の田の穂向のよれる片縁りに君によりな言痛かりとも

今日の前の秋の田の稲は實りつつ、片方に向つて片より伏してゐる。その稲の片縁り伏す如く私も君によりたい。どんなに心痛きことを言はれても。これが歌の意である。しかしここには稲の

片縁り伏す如くといつてゐるが、歌の直接表現では、「如く」ではなく、稲が片縁り伏すそのままにであり、稲の伏すのと自分のよれるのがその儘同一なのである。稲の伏す姿を、自分の姿にしてみるのである。象徴點は「君によりな」である。この片縁りは稲であり、それが皇女の意向である。秋の稲の自然的形體が、片縁りの象徴點をおほひ、稹積皇子によりたき意向をも覆つてゐる。即ち完全なる座として成立してゐる。秋田が意向を覆ひ、全體を自然的意味にしてゐる。ここ迄來れば、これは比喻ではない。座が自然的性質、具體的性質だからである。目にみゆる秋の田が、そのまま自分の意向である。意向を秋の田を借りてあらはしてゐるのではない。この點でこの同じ巻二のはじめにある「磐姫皇后、天皇を思ひて御作歌四首」中の最後の一首

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへの方に我が戀やまむ

は但馬皇女の御歌と同じく秋の田であつて、秋の田の景觀が、そのまま皇后の御意向である。表現と意向とが自然的意味におほはれ、象徴點「朝霞」も自然的意味におほはれ、座は確立して定りなき御心のくるしさが出てゐる。朝霞は皇后の御心のため息とも見ゆるのである。かくて象徴點は中間餘剩層を移動して、座を擴大し、何れの部分でも、表現と意向とを連結する。ここに於いて意向は心よりも自然よりも一步高くなる。随つて高部象徴とは寫生完成の意味である。

高部象徴の論理的意味。

- 一、象徴點が全體的關係となり、重心の位置になる。
- 二、習慣的連結、機械的連結が、自然的連結となる。
- 三、象徴點が全體的關係となり、自然的連結となれば、象徴點は既に存在の必要なく、随つて象徴點は消失する。同時に中間餘剰は著しく感動的意味になり、表現に對して敏感になる。

四、表現面は自然的意味を中間餘剰にまで滲透させるので、表現の全體が自然的になる。かくて表現は自然的意味に即して象徴的意味を成立し、自然的具體的に表現作用を定立せしめる。

五、かくて意向の表現は、自然的である。意向は自然的に表現になる。意向を表現するのでなくて、意向は表現せらるるのである。

かくて餘白の藝術は成立し、餘韻の藝術は成立する。象徴は意向と表現との不適合に始まつて、中間餘剰と、その中に成立する象徴點の移動とによる適合を成立せしめる。之れは言葉の場合の

象徴性とも同一で、不適合の適合への傾斜である。かかる傾斜によつて我等の藝術は成立してゐる。ここに吾が藝術の傾向性がある。象徴性は傾向性である。

而してこの場合寫生とは、表現を象徴的にし、且全體を自然的ならしむる意味である。換言すれば高部象徴化する働が、寫生である。流轉の美は、前述の如く二つの性質を持つてゐた。第一は傾向性の美であり、第二は不完備性の美である。傾向性の美とは明光的にあらずして、中間餘剰が象徴點に向つて傾く意味である。不完備性の美とは、表現面の不完備であり、中間餘剰は大きく、薄明的である。表面不完備の如くでありながら、中間餘剰が大きく、この大きい中間餘剰に支へられて、不完備性の美が充實して來る形である。かくしてここに象徴の問題は、表現の中心問題と見らるべきであらう。

附篇 赤彦先生の事

一、少年の書	二七—二四七
二、補習科	二四八—二六一
三、久保田先生	二六一—二七四
四、久保田先生	二七五—二九〇

一、少年の書

一

氣がついて見ると明治廿八九年に、私などがやうやく讀書をはじめた頃の読み物と、今の兒童の読み物とは、かなり激しい相違がある。今の子供は現代文、特に子供の爲の現代文から読み始めるのに、私達の周囲には決してさういふ読みものはなかつた。學校の教科書も今と昔とは相當に違ふが、読み物もひどく違つてゐる。

私が教科書以外に讀んだのは第一に「皇朝史略」である。水戸の青山延子のかいた漢文の歴史で、これを父から習つた。尋常二年の時である。黄菊の咲いてゐる縁側で、これを暗誦した秋の日の光が、今でも思ひ出せる。少し自分の力に及ばぬものを暗誦するのはたのしみである。どうして父がこの書を選んだのか、私にはわからぬが、父は水戸學の傾向があつたので、自分の子供にも、この水戸學を興へようとしたものと思はれる。しかしさういふことを、私には一度も言つたことはなかつた。むづかしいのは天皇の御名であつたが、それを乏しい自分の周囲のものに連

結して記憶した。父は一度しか読んでくれなかつたが、きちつと覚えようとして全力を集中した。

田舎の小さい學校で、二學年合級になつて居るので、私は上級の方の教科書も聞いてゐておぼえた。教室はつまらないので家での讀書はたのしかつた。

尋常三年になると「論語」をはじめた。朝早く起きて先生の所に習ひに行つた。教科書は朱子の集註で、二十卷習ふのに一年ばかりかかつた。歸つて來ると父は習つた處を暗誦させた。素讀と暗誦とが學習の全部で、今から思ふと随分偏つた方法であつたが、それがかへつて子供の心の奥にしみつきついてゐて、學ぶのが楽しい。母が先生のところに「論語」の御禮に行くとして反物を包んで炬燵の上に置いてゐたが、その包や水引の形などを、今もそのままに覚えてゐる。それからあとで「論語」を習つたことがあり、教へたことも數回あり、のみならず「論語」の教科書版も作つたりしたが、いつもその基礎になつてゐるのは、この幼い時の學習である。

かういふ自分の經驗からして思ふことは、最初に與へるには、天下第一の書が最も適當ではないかといふ事である。年經て讀む毎に深まつて行く、そして、生涯誦讀するに足る書、これが第一に與へられてよい。そして繁瑣な講義よりも、直截な素讀でよい。素讀でも大體わかり、それ

で處處子供らしい、そして子供には子供だけの感動を得たものである。すぐれた古典は、そのままで子供にもわかる筈である。この點は數學や物理とは自然にちがふ。わかりきる時もないかほりに、まるでわからないこともない。しかも猶常にそこから高い香氣が出てゐる。

この頃教室で沈芥舟の「學畫編」よんでゐる。ある時ふと素讀してみようと思つて、よみ出した處が、つかへてしまつて讀めない。不手際に一節をよんでやめた。學生達はくすくすわらつた。家にかへつて考へてみると、漢文を自分用では大體讀み下しにして間に合せてゐるので、かへり讀みをするのは、別の一つの技術である。外國語の書物を日本語にして、頭から讀んでゆくのと同じで、どうも別の特殊な技術であるらしい。ことに支那の時文は、かへり讀みは出來ない。でも子供の時の習慣があつて、朗朗たる素讀は、體が透明になるやうな氣がする。

二

そのあとでは父の職業の關係で、父とは別れて住んで居たので、「日本外史」をよんだ位で、それからは國文の古典に移つた。幸私の郷里には龍谷文庫といふ書屋があつた。小平小平治先生の

藏書である。舊い高等師範の地歴科出身で、長野師範の教諭だったが、早年にして歿し、私は先生を知らないのである。その時高等一年生であるから、今でいふと尋常五年で、その頃からその藏書を借覽した。これが私には實に仕合せなことで、「竹取物語」、「土佐日記」、「太平記」、「平家物語」、さういふ古典をよんだ。「出身」といふことを言ふならば、私の出身は第一に龍谷文庫である。入口は北にあり、苔の間の飛石を行くと三間の瀟洒な文庫。南は地がひくく、ここに池があり、池に蓮があり、水の湧く所に合歡の樹がある。蓮の花咲き、合歡の花の咲く夏の朝はことにすがすがしくて、私も年とつたらこんな書屋をほしいと思つた。「少年讀本」であつたか「契沖阿闍梨」といふ書がある。その口繪に木版の庵室閑居の圖があり、その清境をここに思ひくらべ、この文庫を天下最上の至域だと思つた。この思は今猶消えない。もう五六年もしたら郷里に退隱して、かういふ書屋を作つて、住みたいと思ふ。ただ藏書の半分は自分の學校に寄附したが、でもまだ半分は残つてゐるので、十年位はその書を読んで暮すだけのものはある。身邊雜事多く、思ひわづらふことのある度に、この心持がおこつて来る。

一冊借りてくると、その本をくりかへしくりかへし讀んだ。勿論直接に原文をよみ、ひとりず

ましの理解をしてゐたものである。例へば「ぬかづく」といふ言葉は、前後の關係で丁寧におじぎをすることだとはわかつたが、さてその言葉の意味の由來はわからない。土下座をし、そこでおじぎをする時に、額に糠がつくので、ぬかづくといふのだらうと思つた。後に父にせがんで、「言海」をかつた。この言葉を皆おぼへたら、本をよむのに困らぬに相違ないと思ひ、且自分の今迄の難解の語が一一わかるので、この辭書に熱中してしまひ、始から終まで三回位も反覆して讀み、殆ど全部暗記してしまつた。これはすつとあとで十七八の頃である。「言海」の中に「パン」について、

小麦粉ニ甘酒ヲ加ヘ、水ニ捏ネ合ハセテ、蒸焼キニシタルモノ、饅頭ノ皮ヲ製スルガ如シ、西洋人、常食トス。アンナシ
マンジュウ。

といふ説明のおかしいことを發見したのも、この「言海」讀みの結果である。

私の古典の讀み方は、三回位讀んだ後に、大部でないものは是を筆寫した。古典ばかりではなくて「新小説」に出た、島村抱月氏の「待間あはれ」といふ小説なども寫した。「金色夜叉」で鹽原をよみ、またこれで鹽原をよみ、鹽原は私には、今も一つのなつかしい地として残つてゐる。

恐らく一度も行かずにしまふ地であらうが、子供の時によんだものは、何かしら神聖な地として心の奥に残り、行つて居ないだけに、感が長く續いてゐる。「萬葉」もよみ、「源氏」もよみ、「八犬傳」もよんだ。「源氏」や「萬葉」は教室でよむ關係で、今もそれに接してゐるが、「八犬傳」や「太平記」や「盛衰記」等は、その後よんだこともない。ことに「八犬傳」は大きくもあり、追憶の感から言つても、決してすぐれた價值とも思はれず、再びよむ時もあるまい。時間も十分にあり、興味も十分にあつた少年時代であればこそ、この小説もよみ得たのだと思ひ、仕合せに思ふ。

さういふ譯で手前勝手な読み方ではあるが古典はいろいろ讀んでゐる。私の下の級の受持の先生が、教員検定をうけるとして、休みの時間にも運動場に居ながら本をよんでゐられた。何の本かとみると「神皇正統記」である。「仲仲むづかしい本だ」と言はれるのに、私などは前年位にとつくによんでしまつてゐたので、どこがむづかしいのかと意外だつたことが思ひ出される。筆寫したことは特に周密な讀には有效であり、この方法を今でも採用したいと思つてゐる。

三

私は小學校を終つて補習科に行つた。ここでは島木赤彦先生に教はつた。赤彦先生は地理でも歴史でも算術でも唱歌でも何でも受持つた。地理は日本地理、これが私には大變に爲になり、歴史は西力東侵史。それから時時は堺枯川氏の小説や、「平民新聞」をよんできかせて下さつた。赤彦先生が社會主義方面の文學や議論を、子規、左千夫兩先生の文學と共に、教室であつたのは、今から考へると不思議であるが、先生にもその頃はさういふ處があつた。けれども何といつても私の最も感化を受けたのは國語である。教はつたのは一年間であるが、この一年間が私の國語國文に對する方面では生涯を決定したものである。

赤彦先生の父上が私の父を教へ、父が先生を教へ、先生が私を教へ、私は先生の娘を教へた。これも仕合せな因縁である。國語國文に關する解釋はとにかくとして、文學についての鑑識は、この時にすつかり基礎を作られた。私が専門を東洋藝術研究の方面に持ちながら、猶文學や言葉の問題にも、興味を持つてゐるのは、子供の時からとは言へ、赤彦先生があつたからだ。先生は教室の机の上に、煙草盆を置いて、キセルで煙草を吸ひながら、楽しさうに教へてゐられた。國語は落合直文先生の「中等國文讀本」で、この中の森鷗外さんの「水沫集」の文章などは、今で

も思ひ出す毎に香氣の高さが、感じられる。夕ぐれの田舎道を馬車でゆくと、道を横ぎる猫のこ
とがかいてある文章は、何から出たのかおぼえてゐないが、自動車などで夕暮に田舎道を通る時
は、夕ぐれと車とのほひの中から、この少年時代の感が身をつつんで来る。鮮かに體の中から
湧いてくる感だ。本を開いて先生が讀むのを聞いてゐると、文は底の底迄明るくわかつて来る。
素讀がここでも生きて居た。こんな楽しい教室は私にはその後なかつたのだ。

煙草がなくなると、生徒を教室から買ひにやる。金が無いときには、借りて来いといふ。月末
には序に借が、いくらあるか聞いて来いといふ。それにも使ひよい者と、使ひにくいものとある
のか、私は一度も、その用は言ひつけられなかつた。算術は樺正董氏の教科書であつたが、中
は先生に出来ないのがあつた。すると「ちよつと待つて」と言つて隣の教室に行つた。そこには
平澤先生が女子の組を教へてゐた。それが今日の古今書院主の橋本先生である。平澤先生が來て
解いて行かれると「有難う。どうだ、皆わかつたか」と島木先生は言つて次に進んで行かれた。
それから平澤先生は地文學を教へて下さつた。科學のさわやかさを學んだのはこの時からで、私
は後に柿の花を研究して、植物遺傳學者として立つつもりになつた頃もあるが、それはここに

原因があつた。

この補習科の一年は、實に愉快だつた。そしてこの時に讀んだものは、當時の現代文學であつ
た。子規、虚子、左千夫、漱石。さういふ「ホトトギス」派、「馬酔木」派（「アララギ」前身）の文
學が私をとらへた。

四

このあとは明治三十七八年は師範學校入學準備の二年で、この十七八の間に、私はひとり
「大西全集」の「論理學」や「倫理學」をよんだ。このことが後迄續き、長野の師範學校では後
の高等師範學校教授佐木秀一先生、佐藤熊治郎先生に教へられ、更に後年自分の専門を選ぶに
あたつて、哲學科をとつた原因にもなつてゐる。自分の頭にはあまる學問を、身を入れて讀むた
のしきは、この時に得た。

この當時島崎藤村氏が信州小諸の町に居られ、私はそれより少し千曲川上流の地、白田の町に
居た。「藤村詩集」に出てくる風物に、この地と共通のものがあつた。淺間を眺められる丘の上で、
ことに春の日の午後など草をしいて、この詩集をよんでゐると、自ら涙が頬を流れたものである。

二三年前に音楽學校で、國文の時間、思ひ出してこの詩集を教科書にしてみたが、私達の頃とは心持が違ふのか、今の青年達は、かういふ詩には、心を動かされないやうに見えた。教へてみると、それよりも赤彦先生の「十年」の方がよかつた。これを私は美術學校と音楽學校との兩方に三年ほど續けて使つてみたが、成績がよかつた。「古事記」「萬葉集」「十年」。これがその順序である。

「十年」の歌の一つ一つに就いては、その背景になる様なものを知つて居、この講義だと私は得意である。然しこの二年ばかりそれを休んでゐる。それを教科書に使ふ程の平かな心になれないからで、私は却つて「竹取物語」などの暢びやかなものを使はうとしてゐる。

然しかういふ書物を教室でひらくと、少年期に讀み、そのまま壯年期に開くことなしに通つてきてゐるだけに、三十年振に舊友にあつたやうな氣がして、何かと昔を思ひ出す。愛人と語るやうな心持で、これ等の教科書を讀むのである。今の少年ははじめから少年の書を讀むから、三四十年を隔てて、それにめぐり會ふやうな機會もない。新聞のやうに、その時その時に讀み捨てて行つてゐる。さう思ふと、少年の讀物なく、成人の書のみの世界に生れて、はじめから成人の書を讀んで來た自分を顧みて、これも亦仕合せであつたかと思ふ。十七八迄に日本の古典をほんと

に自分一人の力でよみ、それから後現代を學んだ私の身を、仕合せであると思ふ。(昭和十一年十二月一日、書物新潮)

一、補習科

私は十六の春信濃諏訪山浦の高等小學校を卒業した。そして私の村から一里半ばかり離れて居る玉川小學校の補習科にはいった。私は姉と、まだ春の浅い山日向の林に行つて、薪を伐つた。樹の梢には記憶の様に、白いクブシの花が咲いてゐた。私が日日玉川の補習科に通ひ出したのはその薪が一始末ついて、畑に黄な菜の花が咲き、林にはほんのりと山櫻の花の咲きそめる頃であつた。私がそこに通ふ様になつたのは、補習科の先生が久保田俊彦先生だつたからである。久保田先生のお父さんから私の父は習ひ、私の父は久保田久保田先生を教へた。この關係が私をして久保田先生の生徒たらしめたのである。先生のお父さんも、私の父もはや故人である。―かう書いて來ると塚原先生の事、父のことを思ひ出でて、私は胸がつまつて來る。塚原先生といふのは久保田先生のお父さんである。ほんとに人のことを考へるのは、人の亡き後である。父や塚原先生の亡き今日になつて、始めてつくづくと思ひ考へる事が出来る。塚原先生がその郷黨のために残して行かれたものは、眼に見られるものではない。それだけに私は一層はつきり思ひうかべ

る事が出来るのである。父が先生を敬ひ重じてゐた事は、塚原先生の書風を、父の書風がうけてゐる事でも明かである。今の様に斷絶的な教育にあつては、生涯師の書風を自分の中に残す様な、深い影響は望み得られない。字が似るといふ事を假初な模倣であるとする事は出来ない。

玉川小學校の補習科は、私の今迄に受けた教育の中で、最も意味も深く、また最も楽しかつた教室である。橋本福松先生のその頃は平澤先生であつたが、私達はこの先生から地文を習つた。M先生から理科を習つた。あとの學科は、皆久保田先生から習つた。

十六七といふ頃は、いはば智識の曉である。殆ど餓え渴た心で、新らしき智識をむさぼり求めた。「地文」といふ學科がその頃の位私の心を爽かに且延びやかにしたかわからない。先生が面白いものは、必ず生徒にも面白い。先生の面白さが直接に傳つて來た。後には之より少くなつたが、私達の級友は男が七人に女が三人である。平澤先生は時間の經つのを忘れ、私達は眼と耳とだけになつてゐた。そして時間割では一時間といふ授業が、二時間も三時間も續く。その面白さが今も猶残つてゐる、科學の爽やかな延やかな趣が私から離れない。この有難さは、全く其の時

平澤先生から得たものであつた。その頃、丁度玉川村の道路の工事に土工が澤山入込んでゐたので、女生徒は暗くなると物騒だと心配してゐた。そこで女生徒は地文をやらないことになつて、それは結局私達には好都合であつた。先生が夏休に東京に出て坪井正五郎博士の人類學の講習を受けて来て、人類學の話を初めることになる、長い夏の日も常にくれた。玉川村を出はづれる頃は障子に灯の影がうつり月が上つてゐた。そして私は暗い林をぬけて、母の心配してゐる家まで歸つて来た。

平澤先生が私を感心させたことは、先生の激しい熱心な勉強であつた。私はその後も先生を思ふことになまけてゐる自分を鞭うつた。この先生が今は出版の上で、乏しい私の著述について色と御心配を願つてゐる。師弟の縁の尊さを思はずには居られない。

M先生の理科は暢氣である。第一に最高熱度が攝氏にあつて百度である。第二に兩方の電信局で同時に發信すれば、その電文は兩方のが真中で混交して、譯のわからないものになるといふ。金屬の熔解に用ふる何千度といふ熱はどうしたのですかと聞くと、そんな筈はない。百度より以上の熱はない。もし有るとした所が寒暖計がないのだからわかり様がないではないかといはれるの

である。此所には認識論の面影がある。私は師範學校を卒業してから、この先生の下に行つて、鮎澤重治君、故竹村定一君等と共に居た。私の短かに二年の小學教師は、M先生の信任と庇護の下にあつて愉快に若若しい生活をなし得た。私がM先生の所によられた一つの理由は、手工科であつた。私達の師範學校での級は、農業と手工とに分れて居て、私は西尾實君、沖浦重太郎君、伊藤泰輔君等と共に手工科であつた。手工の設備をするといふ事が、その湖南村への赴任の一つの理由であつた事などを思ふと、夢の様な氣がする。

その外は殆全部が久保田先生の時間であつた。その中で私を最も喜ばせたのは、國語と綴方とであつた。國語の教科書は落合直文氏編の「中等國文讀本」の三あたりからであつた様に思ふ。その中で今もよく記憶してゐるのは、森鷗外氏の「水沫集」中にある「うたかたの記」の一部である。先生のあとについて讀んで行くのが、ただ恍惚とした楽しさであつた。子供らしい敏捷な直覺力で、私達にはその課が先生の氣に入つてゐる文章であるかないかがわかつた。その上先生は一課毎に、批評の形ではなかつたが、文章についての批評をした。「うたかたの記」は、先生がすきであつたので、私達は尙更すきになつた。一人の娘が、銀紙でまいた菫の花束をうつてゐ

る。その花賣の娘が犬に花籠をおとされて、泥土にふみにじられて泣いてゐると、それを日本の青年畫家が助けてやること、その青年畫家はその花賣の娘を中心にして、そこに波と鳩とを配して一つの畫面を作る。ロオレイの歌曲もその連想の中に入つて来る。——今にして思へば幼いロマンチズムであり、その畫面の構成も私を感心せしむる程のものではないが、私達はすつかり純な柔かな情景の中にかかれて行つてしまつた。私はそれを習つてゐながら、ため息をさへついたものであつた。

かすかに眼を閉づれば、私にはありありとその情影を眼に見る事が出来る。去年の秋、ややぐらい上野の音楽學校の廣間の中で、その名のみ知り慣れて久しいロオレイの曲を聞いた。そして私はあの青年になりつつあつた當時の感慨にうたれ、いつか眼ぶたの熱くなつて来るのを覺えた。

久保田先生はその頃「文庫」に新體詩を出して居られた。そして歌もはじめてゐられた。藤村氏の詩を先生から習つた。清水濱臣の今様が讀本に出て來た時であつた。その今様を皆に消させて、その代りに、「藤村詩集」の「葉かげに雲の動く時」といふ句のあるあの詩を寫させた。先生

の丸い重い、そしてややかすれた聲はまだ私の耳にある。私は文學に對する愛好と鑑識とを先生から學んだ。私の生れ育つた湖東村上菅澤には龍谷文庫といふ文庫があつた。もと長野師範の先生であつた小平氏の藏書である。私は十二頃からそこに行つて、太平記、平家、竹取、土佐、保元、平治さういふ文學や、篁村氏の「雀躍」「むら竹」等の小説を借りて來た。それを何回となく繰返して讀んで、終に私は暗記した。私は久保田先生の所に來る迄に、さうして日本の古典は一通讀んでゐた。それが先生の下に來て、はじめて眼をひらいた。ここに「龍谷文庫」があり、久保田先生があつたといふことは、私の生涯の方向を作つた。明治卅四五年などに、ああして自由に書物を取り得られたのは、有難いことであつた。もし私を歴史的に言ふならば、第一に龍谷文庫、第二玉川補習科、これが私を生んだのである。龍谷文庫に就いて私を更になつかしくさせるのは、後になつて私の友の藤森省吾君や清水謙一郎君がここに來て住み、特に清水君は文庫の中に寢泊りをしてゐた。また私は、その文庫に書物を残してなくなられた小平先生の弟であつて、俳人なる雪人氏に伴はれて、石器の採集や山遊に行くことが多かつた。若葉が茂りの香をたててゐる、八ヶ岳山麓の川に沿つて遡つたことがあつた。私は狂ほしい情感に耐へられなくて、耳迄水の中に浸して、水の中で眼を開いてゐた。——さういふ情感がすでに私の上に来て居た。

その頃「ホトトギス」には、夏目漱石氏の「我輩は猫である」が載つてゐた。「ホトトギス」が来ると先生は「俺はな、これをよんで居るから、皆は書取をして居ろよ」といつて、さつさと宿直室に行つてしまつた。よんでしまふ迄は、午後になつても教室に出て来ない。私達は書取りをしたり、話をしたりした。それが冬でもあると、火鉢のまはりに集つて、女の生徒も一緒になつて、たのしい話をしあつたものであつた。何の話をしたか、今は皆わすれて居る。たたこんなことだけおぼへてゐる。この中で誰が一番早死をするかといふことが話題になつた。私が一番早死で三十、久保田先生はその頃二十八であつたが、先生は三十五といふことであつた。しかし先生も既にその豫定より十二年、私は五年生き延びてゐるし、その折の友達は皆達者である。そのうちに「失敬失敬」といつて先生が教室に出てくる。そして授業がはじまる。

時によると先生は一時間位おくれて學校に来る。徹夜して歌を作つてゐたといふことは眼をみればわかる。私達は先生のさういふ所を心から尊敬し、愛重してゐたのであつた。それで誰もそれをとがめるものはなかつた。私達は先生によい歌が作れたかときいた。先生はしよげてゐる時

もあり、得意になつてゐる時もある。得意の時は必ず自慢をいつた。そしてよく先生は自分の詩や歌を寫させた。それは「山上湖上」の中にある新體詩であるが、少女の桑摘の歌の終にあつてかういふ一節がある。

娘小指に我が手をそへて

摘んでやるならとどくだろ

それを先生は、書きなほし書きなほした紙から塗板にかいた。外はもう暑い夏の日光の見え初める頃で、遠く湖水の先の山脈の上には、夏雲さへ立つてゐた。先生は充血して赤い目をしてゐた。ここ迄かいて、来て暫く考へ、そして「娘小指に我が手をそへて」を、「娘小指に母が手をへて」と直した。私はなるほどと思つた。もとのままでもよいではないかと思つた。先生の心の中には、教育者が居たのである。「山上湖上」には、「我が手を添へて」となつてゐる筈であつた。

私達には先生の授業も歌の勉強も、生徒を投出して宿直室で「ホトトギス」を讀んでゐることも、それから時時は腹をたてて、生徒をつき飛ばしたり——ある時は生徒が庭の土の上に突倒されたりした。そしてさういふ立腹は、之を必ず胃病のせいにした。「俺は今日は胃がわるくて、腹

が立ちさうだから、皆静かにして居ろよ」と言ふ朝もあつた。そしてそれ等一切の事が、自由で、自然で、新鮮で、私達には大變によい心持であつた。ああいふ傍若無人（といふと形容に變な連想が伴ふが）の態度が、純粹であり直接であつただけに、私達は先生をより明かに感じ得た。ほんとの教育はああしてすべきものであると、私は今も思つてゐる。ただそこには最もすぐれた先生が第一に必要なであり、それが全部である。

四五年前の事であつたが、私の級友が田中王堂氏に、哲學の文章は口語がよいか文語がよいかと尋ねた。その時王堂氏は事もなく之に答へて、「なり、たりといふのを文語などといふのが既におかしいでせう」といはれた。私達の補習科の頃は、「言文一致」體が行はれはじめて間もないことであつた。私達は寫生の外に綴方はなく、綴方の文體は「言文一致」で書くべきであると教へられた。そして寒川鼠骨氏の「寫生文」「日記文」などが、読みきかせられた。私達は先づ見ることを學んだ。

次に圖畫がまた全部寫生であつた。テエブルの蓋を持つて外へ寫生に出た。學習を教室内の事のように思つてゐた私達には、その野外での仕事は愉快であつた。しかし始の間は野外の草花や小鳥や雲などに心をひかれて、時時繪をかく事から心を亂された。私達の最初の野外寫生は、神の原の原氏宅であつた。丁度五月で空をしきりに雲の行く日で、雲の通る度に大きい陰が壁に出來て、私達は驚いた。野外に出ない時は、室内で草花の寫生をやつた。その寫生の材料はその前の休時間などに、田や畑や林の間から取つて來なければならなかつた。あれにしようかこれにしようかと、濃い紫の鳥かぶとの花や、赤いようぞめの果や、もう枯れかかつた女郎花の花などを選びとることは楽しいものであつた。私達はほんとに愛すべき花の多いことと、その美しさを感じた。ことに心ひそかに一人の級友を愛しはじめて居た頃であつて、その隠した愛を持つて、それらの花に對すると、一層深く愛すべきものの世界と共にあることを感せしめた。私達は描くといふ事よりも、愛するといふ事を更によく學んだ。圖畫の折に久保田先生はあまり出て來なかつたので、いつか先生のかほりを私がする様になつた。先生は時時來て生徒の畫をなほした。しかし一度先生に手をつけられると、草屋根は藁鳩の様になり、藁鳩は火山岩の様になつたので、生徒達はひそかに先生の補筆を怖れた。寫生の時間は騒騒しかつたが、しかし私にはその楽しさを忘れる事が出來なかつた。全く手本をやめて、自然から直接に學ぶことを私達は先生から教へら

れた。

ある日先生は教室で一心に物を書いてゐられた。それは「信濃教育會雜誌」の論文であつて、圖畫は全く寫生にすべしといふ主張であつた。それには當時、いろいろの反對があつた様であるが、しかしその主張が或は小學校の圖畫教育を全く寫生で行かうとする思想の最初のものではないかと思ふ。不思議にも玉川村にこの系統が残つて、それよりほぼ十年を経て、中川紀元君がここに教師をして、生徒に純粹な寫生を教へた。今日の初等教育の「自由畫」といふものの源流の一はここに有つたものと思ふ。しかし久保田先生はその當時は日本畫の模寫主義から脱しようといふ意向の方が強かつたために、かへつて直に西洋畫そのものに入らうとされた傾があつた。私達は、先生から大變に窮屈なそして變な透視の法則を習ひ、之によつて描くべきことを教へられた。例へば、距離點 Distance point を、心點 Principal point のすぐ近くにとるのである。心點を常に畫面の中心に置き、距離點はそれぞれ心點と畫面の左右兩端との中間に置かれた。隨つて一つのマッチ箱と雖も、非常に激しい歪が出来て、大建築物の感があつた。私は今畫學を自分の學生に教へてゐながら、このことを非常なつかしさで思ひ返へしてゐる。

この頃丁度日露の國交が險惡になつて居た。ある日平澤先生が、私達の教室に飛び込んで来て、「久保田、久保田、露西亞の軍艦をやつつけてしまつた」といつた。これが戦争の始であつた。私は學校から横井時冬氏の「日本繪畫史」を借りて寫した。それが今も私の手元に残つてゐる。私の美術史研究はこれに始まるのである。そして先生は「馬酔木」といふ雜誌をとつてゐた。私も姉から金をもらつて、その雜誌をかつた。伊藤左千夫先生が返事を下さつた。これは「アララギ」の前身である。また私は小説をよみたくて仕方なかつたが、先生は、「河西はよせ」と言つて、かしてくれなかつた。この頃尾崎紅葉氏が死んだ。その門下生の鏡花氏のよんだ弔文が今も頭に残つてゐる。玉川學校にはこの時木外先生が居た。私達は一二度先生から俳句を習つた。

今朝の霜とんぼ大方居ずなりぬ

といふ句を作つて、木外先生に大變にほめられて、一里半の道を息をきつて家にかへつたことがあつた。

そしてこの頃のことと思ひ出すも一つは、冬も決して足袋をはかなかつたことである。足の皮が凍つて、一寸物にあたつても、血が流れて、下駄を赤くした。それでも私はじつところへてゐた。道のあるいてゐて足がこごえると、道傍の雪の中にその血の流れてゐる足をつきこんだ。そ

してその反動から高まつて来る暖かさを得んとした。

藤村氏の「飯倉だより」を読むと、「初戀を思ふべし」とかいてある。私が更にこの頃のことを思ひおこす一つのなつかしさである。その後五年たつて、私はやうやくそれを手紙でうちあげた。稻の枯株の上にふる雨がややけぶり、日向にかんざうの芽を僅かに見ることの出来る頃、私達は補習科を卒業した。同時に久保田先生は上諏訪の學校に轉任され、それと共に、補習科は廢止された。

「君が園は花のさかりなり」

と英吉利の詩人はそのソネットの一つに歌つた。そのころはもとより愛するものの生命に關してであるが、私達はその花のさかりをあらゆるものの生命にみたい。私達の住む狭い世界の何處かに、今花のさかりだといへる様なものをほしい。(飯倉だより)(大正十一年十一月一日記)(大正十一年十一月號 信濃教育)

附記。「赤彦全集」第一卷に「教室の水桶に兒等種種の花を活けたり」と詞書のある先生の歌が七首ある。これはこの教室の歌で、中に、

百垂りの千垂りの花のむかふして盛りすぎたる海棠の枝

海棠も小梨もちりて水桶にさす花無みと青葉にて居り

教子は十人に足らず山吹の花をめぐりて机並ぶる

山吹の花ちり浮ぶ水桶に蛙は鳴かず泳ぎてを居り

といふ歌などがあつて、昔のことが思ひ出される。(昭和十二年七月三十一日)

三、久保田先生

人の生涯の中で、少年期より青年期にうつる十五六歳の年頃は、最も、感激に富んだ時期である。この頃の友情や師弟の情は、生涯、自分の背にしみとほつて居る様に思ふ。私が先生から教をうけたのは、丁度この時であつた。随つて私の生涯の傾向は、この時に定つたものと言つてもよいのである。それからもう二十四五年たつた。この間のことをふりかへつてみると、あまりに事が多くて、何といつてよいのかわからなくなる。先生が諏訪に居らるる間も、東京に居らるる間も、先生に近く居られたのは、身の幸福であつた。特に先生が東京ではじめて家を持たれたのは龜原であつて、その時私も亦、そのすぐ近くにはじめて家を持つた。妻は日日務に通つて居、また私も家をあける事がある。その時は、自分の家をとぎして、幼い長男を先生の所にあづけに出かけた。そんな世話まで平氣で御願して、氣がとがめぬ位、私は先生を親しく信じてゐたのである。長男は鼻たらしで、しよつちう鼻をたらししてゐた。先生が頸をつかまへて、鼻をかんでやると、たちまち憤慨して先生の顔につかみかかりながら、「馬鹿」といつた。先生はおれも久しぶ

りで馬鹿といはれたと笑つて話された。かかる些細なことも、今は有難い思出の種の一つになつた。

この長い間、私はつひに一度も先生にほめられたことがない。先生は私をほめず、私も先生にほめられずしてしまつたのである。私は怠慢な心になる時は、自分の背にいつも、先生の眼を感じる。おそらく私は生涯、此の先生の眼を、自分の背に感ずることであらう。

大正十三年の冬から、約一年半、先生の高木の村と並んだ、おちわ大和に住んでゐた。その時は十二月の下旬であつた。夏前から清書にかかつて居た私の支那畫論研究の一つが、やうやく原稿の訂正もすんだ。明日はそれを持つて行つて、岩波書店に渡さうと思つた。出来上つた原稿を、黒いしゆすの布呂敷に包んで、夜やおそく、石の多い山の中腹の道を、先生の御宅に行つた。「なるほど」と先生は、私の持つて來た原稿を手にとり上げた。ばらばらと紙を繰つてみて、「まじめてみると、中中大きくなるものだなあ」といはれた。原稿の上には、畫學用紙の表紙がついてゐて、それに墨で本の名が書いてある。「丁寧に書いたな」といはれた。私の手紙や原稿の字が粗末で下手なので、いつももつと上手に書けと言ひ言ひされた。大正六年頃であつたが、岡麓氏

からお手本には王羲之の聖教序がよいと聞いて、自分もそれを習ふから、一月に二三枚宛お清書をもつて、岡さんの所に行かうといはれた。お清書のごとは、遂そのままになつてしまつて、私の粗雑難讀の書體は、依然として今に残つてゐる。

何もする氣にならぬので、早く床に入つた。先生に御目にかけたので、私は責任を果してしまつた様な氣がして、ちつくりしたのである。

と、その日の日記には書いてある。

次の年の大正十三年に、私は東洋畫の講義をまとめて、小さい書物をかいた。それは七月の五日に稿をはじめて、その月の廿四日に書き上げたといふ程の、せはしい書物であつた。廿五日には上京して、それを古今書院に渡すのである。廿五日の朝五時に起きた。久保田先生の御宅に行くためである。この山腹にそつた舊道から、まだ朝靄の、水の上に残つてゐる諏訪湖を眺めるのは、愉快であつた。廿日間の疲がいたく體に残つてゐる。この疲れた體には、この朝の水上の靄と、道邊の草の露とが、身にすがすがしくしみた。

先生のお家はまだ戸がしまつて居る。壁に薄黄色のある先生の家の土藏がある。そのうしろの道を上つて行くと、そこは津島神社の森である。森の中はもう明るくて、氣がつくと、小鳥が動いてゐる。枝毎に居るといつてもよい程にたくさんに居る。こんなに澤山居ることは珍らしい。その小鳥が、一羽づつ、皆それぞれに囀つて動いてゐる。私は驚いてそれを仰ぎみた。するとふらふらと體の疲が頭に上つて來た。森からおりてくると、先生の長女の初瀬さんが、下から上つて來た。朝食の用意の買物の歸りらしい。先生のおきる迄まつてゐるからよいといふのに、初瀬さんは先生をおこしてしまつた。先生は私の顔をみるなり、「河西出來たか」と言はれた。養子に行つて私が改姓してからもう十三年になるのに、先生はまだもと通り私の舊姓をよんでゐられる。私は風呂敷から原稿の綴つたのを取り出して、疊の上に置いた。目次をあけて、この書物がどういふ風に書いてあるか、其大體を先生に話した。先生は「なる程」といはれた。ただそれだけである。先の書物の方は印刷がどの位進んだかときかれた。これは丁度印刷最中だつたからである。少しも進まないといふと、催促してやらなければだめだと注意された。初瀬さんをよんで、あの茶を入れて來いといはれた。先生は茶の青い液を、自分の茶碗と、私の茶碗についだ。私は茶碗をとり上げて、一口に無雜作にのみ下した。先生は「河西待て待て」と手を上げて、急いでそれを止めた。それから、「初瀬」と初瀬さんと呼んで、あの茶壺を持つて來いといはれた。茶

壺は小形の鐵葉の丸いので、上に黒い漆がぬつてある。その蓋をとると、中は葉のよくそろつた爽やかな美しい玉露である。「河西みろ、この茶だ」といつて、再び先生は茶をいれかへた。私は謹んで二度目のこの新しい茶をのんだ。

私は味については、もともと粗末である。それで先生は時時「河西も物の味がわかる様になるとよいがなあ」と言はれたものである。或時などは、「其處はおれに食はせろ、君は此處を食へ」といつて、うまいところを自分でたべられた。

茶を入れて下さつたのは、書物の出来たのを祝はるる祝心であつた。第三の書物の稿が今出来上りつつある。しかし先づ第一に見て頂きたかつた先生は、既にこの世に居られぬのである。

久保田先生が歌人としての成績は、量からみても、質から見ても、共に今迄のどの歌人に比べても、決して遜色はない。遜色のないばかりではない、先生に並ぶべき人人を數へて、吾等は僅かに數人を得るに過ぎない。且歌道は多く青年のことであつて、中年後、進境を示すものは甚少い。しかるに先生は精進に精進を重ねて、一步より一步と常に進んで來られた。かくて先生の境地は、實に行き行きて、限りないのである。けれどもこれ程の成績を示されて居るので、歌人と

しての先生には、なほ自ら思ひ慰め得る。今私達の思ひあきらめられぬのは、歌論並びに「萬葉集」の解釋批評の道である。先生の成績は歌人としてばかりではない。更にこの道があつたからである。この方面の成績としては、既に「歌道小見」と「萬葉集の鑑賞及び其批評」がある。しかしこれで盡きない。特に後者は後篇未刊である。この後篇が今年は書かれ、更に萬葉集の講義が、第一、第二兩卷とも出来る筈であつた。

私は先生の「萬葉集」の講義を聴講する機会がないものであるから、講義の出版される日を待ち望んでゐた。或る時私は先生に講義の早く出る様に御願し、前に「アララギ」の新年號にかかれた「萬葉集」巻頭の雄略天皇御製の講義の様に書かれるのかどうかと伺つた事があつた。その時先生は、はじめはああいふ風にかくつもりであつたが、別に書きなほすことにしたといはれた。しかしそれについては、精しくは語られなかつた。書かれてはじめて形の完成するものを、かかれぬ前からたづねるのは無理であるから、私はその問題には深いりしなかつた。その上先生の講義を、示して頂ける日を信じてゐたからであつた。それからまた別の時に、「萬葉」の講義をされるには、ノオトを作つて行かれるかどうかをたづねた事があつた。ノオトは作らないと事もなげに答へられた。すつかり藏めて胸にあるからである。先生の講義の渾然たる所以である。しか

るに先生は、それに手をつけられずに逝かれてしまった。

この點では、いはば先生は技術家であつた。技術家の死と共にその技術も死ぬ。體にいたものだからである。後に残された吾等の痛惜するのはこれである。「萬葉集の鑑賞及び其批評」後篇と「萬葉集」の講義とである。もしこの仕事にして大成してゐたならば、先生の業績は一層大をなしたのである。今迄研究に研究をつみ、考慮に考慮を重ねて来て、もう紙の上書き記さるるばかりになつて居た。この方向から見れば、先生の今迄は、すべて準備であつた。いよいよ收穫期になつて来て、一朝にして忽焉として、去つてしまつた。先生の舊友矢島音次氏が、はるばる朝鮮からうつてよこした電文の中に、「志未だならずして死す。哀惜にたへず」の一節があつた。先生の五十年の生涯はどう思つても、三年短かつたのである。

先生のなし遂げられずに終つたものは、この「萬葉」の研究であつた。しかしこれは「アララギ」門下の人人並びに、その講筵に侍した人人の胸に、今は種として残されてゐる。芽を出し、花さき、實る時を、氣長く待たうと思ふ。或は私の生涯が短かくて、その期を見ずして終るかもしれないが、それはただ私一身の不幸である。私はこれを將來に待ちまうける。この點で先生は

大なる教育者であつた。これが先生のなされた業績の一つであつた。

教育者といつても、教室で教へるだけの狭い意味ではない。先生ももとより教壇上の教師として生徒を教へ、それぞれ深い感化を残してゐる。これは如何にも著しいことである。著しいことではあるが、この點では、他にもこれ程の業績を残した人は、珍らしくないかもしれぬ。故に先生の教師としての業績をば特に歌道の教師として見るべきである。「アララギ」の諸同人、何れもすぐれた作者であり、また選者である。しかし先生程に後人を導き育てた人は少いかと思ふ。それには勿論、先生が境遇の上から、他のどの人よりも歌道に専念になり得たと云ふ事情もある。他に職業を持たず歌にのみ専らであり、専念「アララギ」の事に盡されたといふ關係もある。しかしこれとても、先生が一切を投げすてて、歌道に入られた特異な決心の結果である。専念「アララギ」の事と、歌の事とに盡された事實の底には、先生のこの異常な決心が貫通してゐる。そしてこの決心をして完成せしめ得た處のものは、先生が歌の作家であると共に、更に歌の教師であつた事實を示してゐる。後進を導き育て、守り立て、その人人の心を成さしむる力があつたればこそ、この道をここ迄進めて來られたのである。これはもとより先生一人の力ではない。「アララギ」の如くこれだけ優れた人人がそろつて居ては、各自が分立するのが、むしろ世の常である。

我慢の強い世の中で、かく迄歩みをそろへて來られるといふのは、「アララギ」同人の歌道の精進と、友情の清白を示すものである。しかしこの中にも、何かの中心があつて、常に變ることなく、永續的に働く力の中心がなくては、この事は到底遂げられない。而してこの力の中心となつたのは、先生であつた。この力の中心となられたのはもとより先生の徳のいたす處ではあるが、ただ徳だけではこの事はなし得られない。後進を率ゐ、育てて行く力がなくてはならぬ。すぐれた作家、必ずしもすぐれた指導者ではない。すぐれた指導者必ずしも、すぐれた作家ではないのみならず、すぐれた作家は、むしろ指導者としては劣つてゐる様にさへ見える。この中であつて先生は、常にこの兩者を兼ね備へてゐられた。先生に歌稿を見て頂いた人達は、何れも満足して歸つて行つた。人人の心をのみこんで、導き育て、その心をなさしめたのである。先生の指導を喜び足れるものと感じた所以である。この意味で、先生は實に歌道の偉大なる教育者であつた。

歌道にあつて、一つの型を持ち、その型に後進を鑄込むといふ方法の、指導者乃至教育者は、古來決して少くない。むしろ多きを憂ふのである。弟子何千と稱するも、また必ずしも珍らしくない。しかしその弟子は、皆顔と心とを異にして、しかも全く同一なるものを與へられた。故に個性を育て導くことによつて、かかる業績を残された人は、おそらく皆無ではなからうか。も

とより歌道の消息に通せざる私が、これを何とも斷言し得る限りではないが、かかる事の容易に遂げ得らるる筈でもなく、随つてそれが皆無であらうとは、想像に難くないことである。

先生は極めて多種の性格を持つてゐられた。政治についても、世情についても、歌以外の文學についても、美術についても、教育についても、その他様様の道に、理解と興味とを持つてゐられた。先生は代議士となり、村長となることも出来たばかりではなく、或は興味を持つてゐられるかとも見られた。曾て私に村長にならうかと笑ひながら話されたこともあつた。先生はもと青年期の初に於いては、軍人志願であつた。半夜床上に、腕ぐみをして坐つてゐた。これは軍人になりたくてたまらぬ故であつた。雪の深い冬山に、素足で登つて行つた。これは軍人志願のためであつた。二里離れて居る諏訪明神にはだし參りをした。丑の刻參りである。これも軍人志願の故である。もし先生が軍人になられたならば、如何なる業績を残したか。それはもとより想像し得られぬ事ではあるが、凡庸な軍人として終るべき人ではなかつた。先生は岩垂先生から體操を習つた。蓋し従順でなかつたであらう、しかられたことがある。時は春である。小使室の味噌こしの小箆をもつて田圃に出た。おたまじやくしをすくひ、田の端にわく湯で、それを煮と

がして、岩垂先生の机の引出にあけた。さういふ先生である。凡庸な軍人で終る譯はない。

かく多様の興味を有つてゐられた先生が、他方に自分の缺點とされたことは、先生が感情に弱いといふことであつた。先生はよく私に向つて、「河西は思ひきつたことをやつて、危険でたまらぬ。俺も弱いが、河西はもつと弱い」といつて、私をあはれまれたのであつた。先生の感情に弱いといふことは、これは先生の弱さを示すものではなくて、先生の感情の強さを示すものであつた。さればこそ、この多數の理解と、興味との中を、一圖に歌に向つて集中された。この集中が、實に最後迄、その激しい病氣をまで貫きとほした鍛錬道であつた。この先生の多様と、この先生の熱さがあつて、先生の鍛錬道は、光彩を放つたのである。そしてこの多様性と、鍛錬道とがあつて、先生は最もすぐれた教師となるを得たのである。そしてまた作家となるを得たのである。

この作家の道と、教師の道との合一は、先生をしてすぐれた多くの歌を残さしむると共に、歌の教師としても、多くのすぐれた後進を育て上げしめた。この尊い完成の中にあつて、ただ一つの未完成なる事は、萬葉研究であつた。しかしこの萬葉研究も、亦次の時代の人達に種として蒔かれて居る。即ち教師としての途の中に置かれてあるのである。そして未來の道は、この萬葉研究の道である。先生は、先生の生涯の中で成し遂げらるべくして、遂になし遂げられなかつたこの道を、その歌道の指導者としての道の中で、なし遂げらるであらう。先生の病は急發であつた。此の故に先生の未完成は實に偶然であつた。かかる偶然の故に、成し遂げられなかつた先生がこの残念さを、遠く未來に望をつなぐことによつて僅かに思ひなぐさめ得るのである。

思へば、先生が私の一身に對して、師として導かれ、教へられた事の數數は數へるに耐へない。先生が私に、「河西は、俺がいろいろ心配してやつてゐるのに、少しも有難がらないではないか」と言はれたことがあつた。その時私は、「心配してもらふのが、あたりまへだと思つてゐる」と答へたらば、先生は「なる程よい心がけだ」と言つて笑はれた。それ程先生の恩に慣れて居たのである。私は故國に恩師を三人もつてゐた。村松先生には最も早く別れた。まだと思つてゐた久保田先生には、今度別れた。今は守屋先生一人である。この心さみしさにつけても、自分の道をはげまねばならぬ。私は先生とは研究の道を異にし、天分を異にしてゐる。随つて先生の遺業を継ぎ得るものではないが、せめて自分の道をばなし遂げたい。第一にしかられた行つたのは、先生

の許であつた。このほめらるることのなかつた先生に、せめて最後に一度はほめられたい。それには私の道を勉強するより外ない。私はこの道を通してのみ、先生の靈に導かれ、勵され得るのである。(大正十五年五月八日記)(大正十五年七月號 信濃教育)

四、久保田先生

私の結婚したのは、二十五の年の九月中旬である。仲人は久保田先生である。その時久保田先生は三十七であつた。私は諏訪の山浦に生れて、北安曇の大町へ養子に行つたのである。大町は諏訪から二十里ある。私は先生より先きに出かけて行つて、途中の池田といふ、大町から三里手前の町にゐた。先生は私に一人で大町まで行くなと私の足をとめて置いて、あとから來られた。先生は馬車で池田迄來られた。私はまつてゐて先生の馬車に乗つた。先生は私の顔を見ると、「河西いけないことをしたよ。着物をわすれて來た」と言つた。これは大正元年のことで先帝陛下の崩御間もなくであるから、式も簡単にすますといふので、私と先生とだけが大町に行くので、私の家から先生の所へ式服を届けてあつたのに、私は先きにぶらりつと出てしまつたからである。先生は上諏訪で汽車にのつて、うとう山のトンネル迄來たらば、背中が寒くて氣がついたら、私の式服をわすれて居たといふのである。私は紺飛白に木綿袴をはいてゐる。「困つたなあ、どう

する」と先生が言はれたが、私は、それをどうとも思つて居ない。先生にまかせてあるからである。先生は私に乃木大將が自刃したことを、非常に感動して話された。私は實は乃木大將の自刃したことも、その事情も全く知らずに居て、先生の感動がよくのみこめなかつた。大町へつく時はほぼ大町の養家へ知れてゐるから、この身なりでつかまつてはならぬといふので、町の入口でもう馬車をおりて、少し歩いて對山館といふ旅館に入った。すぐ先生は電話を郡役所にかけた。郡視學の中村國穂氏から、羽織や着物を借りるのである。それから先生は少し横になつて休まれた。何でも風邪をひいてゐて、先生は熱が四十度以上あるといふのである。しかし私はその頃は四十度の熱がどんなものか少しも知らないで氣にもとめず、懐に入れて來た本を出して先生のそばで讀んでゐた。そのうちに養家から電話が來た。養家では馬車の立場に迎へに出たのであるが居ないので、電話でさがしてゐたのである。今でも私は電話がかけられないので、勿論ねむりこんでゐる先生をおこした。そのうちに養家の親戚二人が迎に來た。先生は私が着物を着るのを手傳ひ、袴の紐をむすんで下さつた。それから車に乗るのである。車に乗つた私を、先生は後から呼びとめた。私は素足である。宿の女中さんにたのんで白足袋をかはうと思つたが、幾文だかわからない。途中車を右側の足袋屋の前に止めて、自分の足をあてがつて足袋をかつた。それから私

が先、先生が後で養家に車を飛ばせた。

先生は何もかも心得てゐるので、私はすっかり先生によりかかつて居る。式のことでも私は先生に一一きいてやつた。けれども私はどうしてもたいくつでやりきれない。特にあとの酒の座敷はたいくつだ。酒ものめないし、話もないし、困つてしまつて、對山館で、讀んで居た本を懐から取り出した。すると先生は笑ひながら、本をよむのはよせと注意した。先生は乃木大將のことを養家の叔父と話してゐる。私は足がいたいので、裏の庭に出た。そこには子供が來て、座敷を見て居るのである。その子供と話をして縁に腰かけて居た。先生は便所に立つて來てかへりに私をつれて座敷に入つた。それから間もなく式がすんだ。「ああこれで俺も安心した」としみじみとして言はれた。それから先生は按摩をとつて、七度煎をのんでお休みになつた。明日午前中に車で立たれた。守屋先生が、そんなに熱の高いのにどうして遠い所まで無理をしたのかと言はれたら、俺が行つてすわつて居なくちやだめだと答へられたとあとで聞いた。それに相違ないのである。先生は車にのられる前に私にそつと、着物を明日返せ、着物をかりたことは人に話すなど注意して下さつた。しかし之れから間もなく、養父が私の羽織を見て、諏訪の家の紋はさういふ紋

かときいたので、さうでない、これは借りものだと言つた。そしたら其處に居た親戚の人達が皆聲を立ててわらつた。私も一處に笑つた。それから養父の着物に着かへて、こげ茶のめりんすの布呂敷に包んで返しに行つた。この中村先生も今は故人である。

大正八年十月慶應義塾図書館で、「萬葉集の系統」の講演をされた。先生は四十四歳である。私は十六歳十七歳の時に、教室で先生に教を受けた後、先生の講演や講義に侍する事を得ないでゐた。この講演は「アララギ」の歴史の上にも大切なことであるが、先生自身としても、大切なことであつた。出不精な私も聴講に出かけて行つた。今になつてみると、これが私の講演會場で聴き得ただ一回の先生の講演であつた。先生は與謝野寛氏の後から、講壇に立たれた。與謝野氏は指輪をはめた細い指を組み合せたり、ほゞいたりしつゝ細細と話して居るといふ様な、繊細な講演であつた。その後が先生である。先生の聲は太くて腹から出てくる。さびてざらざらしてゐる。農夫が此處の畑から向の畑によびかける聲である。音樂的な節まはしも、聴衆に媚びる様なしなもなく、ひたおしにおして来る。野人の聲である。これがその昔京童の呼んで「坂東聲」と言つたものであらう。驚いて先生の聲をきいた。この講演の内容は幸に保存せられて、「歌道小

見」中にある。この講演を太くたくましく場内に響く聲でされたのである。そして時時その中に人を笑はせる様なたのしい話も入つて來た。人達は笑つたが、私には笑へなかつた。私は虚心平氣でこの講演が聞かれない。どうかして先生によくやつて頂きたい、頂きたいと思つて居るからである。笑ふ處ではなかつたのである。それからどうも先生の講演がだんだん氣になる。あそこはああいつちやあいけくない。あれでは廻り遠い上に、徹しない。さう思つてやきもきしてゐる。よい所はあたりまへである。悪い所が氣にかかる。はじめには筆記してゐたが、後には筆記をやめて、じつと先生を見てゐた。背の高い、どつしりした先生の體格、額の廣い、しまつた先生の顔。私ははじめての如き心持で、先生を仰ぎ見た。自分の親にたよる心と、親をつつがなくあらせたい望とが、油然として胸に起つて來て、眼があつくなつた。先生には「哲學」がない。「哲學」がないのが傷だと思つた。後になつてその事を私が言ふと、先生は事もなげに「うんさうか」と言はれた。

先生は座談にいつも繰り返し繰り返し同じ話をされた。これは座談ばかりでなくて、講義の時なども同一であつたさうである。同一の話の繰返しはわづらはしいものである。しかるに先生の

話は、何度聞いても同じ新らしい味を持つてゐた。またと思ひながら、新らしく心を引かれて聞いた。先生の歌も蓋し歌境は廣くはない。先生の歌の中ですぐれたものは、霜や小鳥や若葉や何れも信濃の風物に限られて居たし、その風物もほぼ同一のもの繰返して、新らしいものではなかつたが、その度に新らしい味があつた。座談には特にそれが多く、實に先生は座談の達人であつた。この事は先生の文學に於いて、論文よりも隨筆、小説よりも短歌にすぐれた作品を残されたことに相通するのである。

先生は日常の様様のことに、中中周到な用意をされた。何かのことで困る時には必ず先生の御力を借りた。先づかうして、それからかうしてと、如何にも周到に順序立てて教へて下さつた。先生の御話をきいてゐると自分の粗漏杜撰を恥入るばかりであつた。この用意の周到が、先きの論文では、必ずしもさうではない。むしろ論理不周到である。例へば「歌道小見」の如き、先生は非常な苦心をされたにも係らず、論じて猶論じ盡されない所がある。明像の興へられぬもどかしさがある。然るに「歌道小見」並びに「萬葉集の鑑賞及び其批評」の後半部の先生の隨筆は、非常に鮮明銳利である。全く面目を異にしてゐる。論理的に一步より一步と築いて行く道は、必

ずしも先生の得意とせらるる處ではなくて、卒爾として言ひ、卒爾として書かれた様に見える隨筆に、かへつて先生の得意の境地があつた。説明と、媒介とを絶して、一言にして人の肺腑をつくものがあつた。先生のもものは長く苦心し練れば練れる程、短小の形になつて行つた様である。ここに先生の歌人としての面目がある。先生の生活に對する周到なる注意は、先生の歌境に寫生として深い味を示し、論理の不用意は、先生の表出を直接にし、直接にして周到なるものが、洗練之を久しくして、短小形をとつたのである。これが先生の文學であつた。故に先生として最長形體の「歌道小見」も、短小形の連続とみえ、且論理を追つた様に見えるこの「歌道小見」が、思想とならずして、文學となつたのである。先生の論文に論理を望むのは、先生の短歌に論理を望むのと同様に、望むものの錯誤である。論理の指で指ざさず、情意の掌で握る所に、先生の途があつた。(大正十五年九月十六日記)(大正十五年十月號 アアラギ)

二

隨筆の書く所は、感動の姿である。その時その時の、強き感動の姿である。故に今熱をよしとした心が、後涼をよしとする心であつて、決して差支ない。この前と後との間にある矛盾は少し

も隨筆の價値を損しないばかりでなく、かへつて隨筆に生彩あらしめる。隨筆は矛盾を厭はない。感動なきを厭ふのである。されば隨筆は、作者の具體的な、直接な姿を示してゐる。作者の感動を眼にみるからである。そして感動ほどその感動した人を語るものはないからである。

座談も亦感動の姿である。感動のない座談は、香氣のない若葉の様なものである。虚偽でなければ回避である。故に先生が座談の達人であつたといふことは、先生が隨筆の達人であつたといふことと同一である。先生の前に茶をのみながら、先生の座談を聴き得ぬ今は、先生の隨筆を讀むことが、先生を追憶する最もすぐれた道の一つである。されば、「山房漫語」の刊行は、吾等の前に、再び先生を生かしてもらふことになるのである。

隨筆はもとより學問ではない。學問ではないが、先生の折折に書き残されたこの隨筆をたどつて、先生の語られようとしたものに、一つの道筋を立ててみることは、また吾等の追憶の心の一節ひとふしである。

この「山房漫語」所載の隨筆では、最初の「動物性と人間性」が最も舊くて、明治四十年であるが、第二の「和歌の傾向」になると、一躍して大正三年になつてゐる。その間に七年の月日が

ある。第三の「一心の道」は大正五年で、以下大正六年、七年、八年、九年の間に最も多く、最後のものは大正十二年である。さういふ譯で前後十七年間の長期にわたる記録であるが、その後の年の思想は、やはり最初の「動物性と人間性」の中に萌芽をあらはしてゐる。先生の道は一言にして言へばこの大なる鍛錬道である。その依つて來たる所の深く遠きを感じる。

動物性は根本である。人間性は結果の成熟若くは變化である。動物性を離れて人間性なきと同時に動物性を輕視したる人間の陶冶は極めて薄弱な者である。(四頁)

動物性感情の旺盛なるはやがて人間性感情の旺盛を來すべき段階である。此間に立つて教育者の執るべき用意は只指導である。抑壓ではない。矯正である。剷除ではない。思慮ある助長である。角を矯めぬ修正である。(五頁)

この見方の上に鍛錬が生じて來る。これが「和歌の傾向」以下のものに現れる。「一心を集中する。一物に集中する。一點に集中する。狭く濃く鋭く集中する。そこに嚴肅と崇高と悲歎とが一體となつて融化醸成する。融化醸成の一滴は全人類の五臟に滲みわたる一滴である。」と「和歌の傾向」の最初にいつてゐる。動物性が人間性の基礎となるなら、この道より外にはあり得ない。集中する時に、動物性ははじめて人間性の基礎となり、地盤となり、情感となる。人生の生活がかかる組織をとつたのが先生によれば實に文學である。

斯様な點に於て文學は只人類の生活事實その物を基礎として其の上に何處までも根ぶかく生きようとしてゐる。(二二頁)
故に先生にあつては、文學は決して閑事業ではなく、實に「一心の道」であつたのである。

先生の言ふ所によれば、日本人は元來體慾の盛な人種であつた。これは記紀萬葉に徴して明かである。その盛な官能生活が甚しく制慾的に傾いたのは、儒教と佛教との影響である。そしてその結果西洋の様な積極的な文明とはちがつた、鍛鍊された滋味、むしろ鍛鍊された寂びの心境を打ち開いて來た(二八、二九頁)。この鍛鍊は官能の働の熾烈を基礎としてゐるのである。そしてこの鍛鍊には「それ等の肉や感覺機を統率する所の強大なる主觀を要求する。この強大なる主觀に引き緊められる肉や感覺の統率作用があつて、始めて全體が強き若くは深き若くは高く尊き力となり得るのであらう」(三四頁)と言ひ、また「感覺に對する主觀の統率が引緊れば緊る程強く深い力となつて吾人に感得される。強く深く尊く感受される力、夫れを今私は要求してゐる。」(二五頁)と言ふ所以である。

レオナルド、ダ、ヅキンチは親の臨終に際して、刻々に變り行く親の面貌を寫生したことと、

乃木大將が自ら子の墓を掘る心と言ひ及んで、

泣いてゐられぬ心は、泣くより以上のものに全心を注いでゐる心である。左様な心の状態は異常の鍛鍊を経て罕に到達し得る所で、多言や多能では押し付かぬ領域である。藝道に立つものこの消息に觸るる時、初めて多く言ふを憚り、輕輕しく行ふを難する心を生ずべきである。徹底は鍛鍊であり、鍛鍊は苦業である。座上の議論ではない。(一三五頁)

といつてゐる。しからば何故に鍛鍊が苦業道であるか。「人間の持つ興味の種類は無限に多數である。其多數の興味は、みんな人間自然の本能に根ざすのであるから悉く自然の要求である。自然の要求であるから悉くそれを満足せしめんと努めるのが自然であるに相違ない。自然であるに相違ないと言つて悉くそれを満足せしめんと努めてゐては決して所謂「一心の力」にはなり得ない。……四方八方へ擴散せんとする湯氣の要求を抑へて、之を一箇所の狭い口に集注して、茲に始めて機關を動かす動力を生じ得るのである。擴散の要求を抑へるのは不自然である。不自然であつても、力を要求する場合には不自然な押壓をするより外致し方がないのである。……昔から一心の境地に澄み入つたものは、我我の眼から見ると皆不自然をしてゐる。」(三五、六三頁)といふのがこの理由である。不自由道なるが故に苦業道なのである。

先生は實に理解の廣い興味の多種類の方であつたから、この言葉は、先生自らの道を示されたもので、先生の尊い心掛を眼のあたり感ずるのである。そして「一心になる場合は心の働く範圍が狭くなる。従つて興味の局面が縮小される。天才偉人はこれが甚だ自然に行はれるやうであるが、吾吾にはさう自然に易く行はれる譯には行かない。自然に容易に行はれないから不自然に苦勞して行ふより外はないのである。」(三五頁)とて、先生は自ら凡愚の道を心がけて居られるのである。

随つて先生の極力排したものは機敏者であつた。「元來他人の唱ふる主義に容易に共鳴し得るといふことは自己の内心に何等の問題をも持つてゐないといふことである。自己に何物をも持つてゐないで猶自己の存立を保たうとするには、他人の言説行動に依らねばならぬ。自己が主でなくて他人が主となる。他人は多數である。多數の唱ふる所爲す所を見て之に適從せんとするから世の中が餘計に忙しくなるのである。要らぬ機敏者が所在に行住する所以である。」(一五七頁)

かかる譯であるから、先生の用意には、自ら深いものがあつた。「予は歌作りなるが、予の感動が或者を捉へて歌はんとする時、歌の出來あがるまで努めて予の感動を人に語らず。語らざるは人に祕するにあらず。一度にても二度にても人に語れば、發表の衝動は夫れだけ薄らぐわけに

て、自然歌に集注する力の放散を感ずるが故なり。加之、予の歌はんとする感動が重大なればなるほど容易に歌に着手し得ず。着手する時恐怖心起るゆゑ夫れのみにも着手の容易ならぬ心地す。」(八三頁)と言つて、その深い用意を語られてゐる。かういふ先生の言葉に對すると、私は先生にしかられて居る様な氣がする。

この態度を先生は廣く文學の上にひろげて行かれた。「元來東洋人は内に穿つもの深くして却つて外に現はるるものが簡約になるの傾向を有してゐる。従つて外を約して内に穿つた修養の工夫をするものが多くある。外に簡にして内に深からんとする修養が東洋人を鍛鍊的に馴致したことは、東洋思想を考へる上に必見遁してはならぬ要點である。」といつてゐる。然らば鍛鍊とは内深く潛ましむる工夫であらう。「賑やか景氣よきは言論の盛なるを然りとすれども、賑やか景氣よきは物言ひて腹空くの快にして、人を動かし世を動かすの力とはならず。眞に腹ふくれて已むなきに言ふの嚴肅さは何人も否定する能はざれど、夫れすら節約に節約を加へたるは誰の腹にも應ふる心地す。餘り多く抜く刀は人を怖れしめず。抜く者は眞劍ならんも又かと人に思はしむるは抜く刀に虚あるなり。度度抜けば虚あるゆゑ、抜き度きを耐らふるほどの工夫して初めて力は

蓄へらるべし。」(八八頁)といひ、また「教育の祭壇を以て神聖なりとせば祭壇は静肅なるべく、發する聲は森嚴なるべし。斯くの如くにして人心に響かざるの聲なし。聲あるも響き、聲なきも響く。聲あると聲なきとは差とするに足らず。」(八九頁)と言つてゐる。かくて鍛錬とは中に深く藏し、後發する事である。この深さを東洋の學藝に認め、之を以つてまた先生日常の念とせられたるは、著しきことと言はねばならぬ。

先生が正岡子規先生の病床をつぶさに敘して後、

死を宣せられて死せず、筆を執つて休まざるの氣魂、壯健者猶及ばざるの狀ありしもの、異しむべきに似て必しも異しむべきに非ず。信に入れる一念の力は古來斯の如き異常の現れをなすの普通なるあり。一年にても長生きせんと思ひて斯の如き異常の一念に入りたりと見るべきにあらず。病を機縁として斯の如き異常の一念に入りたるが爲めに、一年生き二年生き、醫師の想像し得ざる七年の長きを生き得たるなり。予は常に思ふ。病者長生の消息乃至病者回復の消息、關つて此の點に存する者甚多し。(五四頁)

要心は臆病にせよとはさる事なれど、臆病なるは萬人通有にして、臆病にせよと言はずとも誰も臆病なるに於て後れを取るべきにあらねば、もし少し大膽にすべき部分の多きを考ふるに於て損失なきなり。(五五頁)

神心緊張せる時病決して入る能はず。入るも即ち退散す。退散せざるも長引かず。長引きて死ぬるは早まりて死ぬるに優れり。一分生き延び得れば一分の生活を爲し得べければなり。夫れ以上の事健康者にも望み得べからず。人は皆死ぬる者なれ

ばなり。(五七頁)

これが先生の鍛錬道から來た病氣觀である。人は遂に病を避くる事が出来ないならば、せめて先生の病氣をして、慢性病たらしめたかつた。先生がこの心境で、長く病床に生きて居られたならば、その深さ清さは、想像を絶するに到り得たであらう。先生の仕事が既に書き記される所まで來てゐて、そのままに逝かれたのは残念であるが、これにまけない残念は、先生の病が倏忽として來り、倏忽として先生を奪ひ去つたことである。

先生の生涯の中で、最も苦澁であつたのは、蓋し「切火」の時代であらう。その時代から後漸く清澄な世界に一步より一步と入つて行かれた。「太虚集」「柿蔭集」はこの消息である。先生の苦業と觀じた鍛錬道も、單なる苦業でなく、心の欲するままにして、しかも矩に合する如き、自由なる境地に進んで來られた。先生が自ら鍛錬道は不自由道だといはれたのに、其の不自由道は何時の間にか、澄みて徹せる自由道になつて來た。自然の要求に従ふといふ意味の自由道から、自らにして自然の要求に合する清く深い自由道に入られてゐる。ここに於いて苦業は澄み、不自由は清く、拘束は徹したのである。これが壽なほ長く先生にあるか、或は病長く先生にあるかす

るならば、一層深きをなされたであらう。先生が自體の病氣に氣づかれて、その命短かきを覺悟せらるるや、暫く黄疸の苦難を厭服して、その上で生涯の仕事を爲し遂げようとせられたのである。ここに病にかたんとせられた先生の勇猛心をみるのである。あの病顔に刻まれた縦横無數の皺は、その戦の烈しさを語つてゐた。しかしその苦痛も去り、體も心も安らかになり、體を横たへ得る様になつた時は、もう命數の盡きた時であつた。實に先生の生涯はこの鍛鍊の生涯であつた。語られた所を自ら行はれたのである。座上の議論ではなかつたのである。この先生の遺著をここに讀み到つて、胸せまるものは、唯に私一人ではないであらう。(大正十五年十二月六日記)(昭和二年一月號 アララギ)

卷 末 記

この書では日本の文學と美術との表現に關する考察を主とした。吾等の表現が如何に支持せられ、如何なる形體をとつてゐるかが、この考察の中心である。そしてかかる表現の問題は、表現の意向に基くものであるから、常に表現を意向に結合して考へようとした。表現を意向に結合せしめると必然的に、吾國の國民性の問題と連關して來るのであつて、この問題にもまた一應の思を致した。

この書に關係あるものは、前著「表現の日本の特性」である。本書はその問題を、もつと一般理論の形として整理してみたかつたのである。理論形體といふ點からすれば、本書はまた先著の「東洋美學」、「言語美學」に續く性質を持つてゐる。「東洋美學」を第一編、「言語美學」を第二編とすれば、「表現の日本の特性」は第三編であり、本書は第四編である。そしてこの後に、これ等の考究を更に純粹理論として形成する必要が残されてゐる。

この書物は去年の十一月二十日に、長野市の長野縣女子専門學校でした講演が基礎になつてゐる。この學校は大正の終の頃に、隔週にこちらから通つて、文學論や短歌研究や「論語」などの講義をし、私には思ひ出の深い學校である。熱心に知見と感情とを求めてゐる女性を教へることは、私には實にたのしみであつた。

去年のこの講演は、「日本の表現の特質」の問題で、私はそのために稍精しいノオトを用意して行つた。十一月の末といへば信州では遠山に雪が見えて、風ももはや寒かつた。講演を終へて次の朝早く長野をたつた。教授の山田ひさねさんが、見送つて下さつて、學校からとして果物籠を贈られた。それは見事な梨子で父の靈前に供へるやうになつてゐる。父は去年の五月になくなつた。それは裏の川邊でしきりに葎切のなく聲がしてゐる夜で、何故この鳥はこんなに晩く迄、こんなにはしく鳴くのかと思つた。父は八十歳であつた。告別式も略し、葬式も略さうと私は思つてゐたが、妻は簡單でよいから國で葬式だけはしたいと言ひ、自分で用意をして國に歸つた。父の葬式がその日である。十何里、自動車は狭い山峽の道をゆれて通り、山陰には深い霜があつた。山の皺が一つ一つ見えるまで澄んで明るい日光の中で、炭焼の煙の立ち上るのを遠く眺めて居ると、心に觸れて消えて行つたものが、何かと思ひ出された。東京では思ひ出さぬやうな遠い

事まで思ひ出されて來た。父の葬式をすまして、その夜は大町に泊り、次の朝は早く上伊那郡赤穂の講演に立つて行つた。

東京にかへつてから、其のノオトによつて、段段に原稿を作つた。其等は「俳句研究」、「短歌研究」、「實踐國語教育」、「南畫鑑賞」、「コトバ」、「四天王寺」、「ぬかご」、「讀方教育」、「美育」、「美術」等の諸雜誌に載つた。それが一通りすんだら、かういふ形になつた。

この本をまとめてみると、私にはしきりに島木赤彦先生のことを思ひ出された。先生は大正十五年の三月になくなられて、十一年たつた。先生の教を受けなかつたら、或は私はもつと別なことを考へてゐたかも知れぬ。先生を考へる事は、私には自分の郷土を考へることである。それで急に思ひ立つて、此れ迄様様の時に書いた、先生に關係あるものを集めて見た。いづれ先生の事はもう十年もたつてから、細かに書きたいとは思つてゐるが、今はとりあへずそれだけを集めてみた。この中最後の「久保田先生」は、猶「アララギ」に續けてかくつもりであつたが、二回だけでそれきりになつたらしい。原稿用備忘の紙片に、

久保田先生 (3)

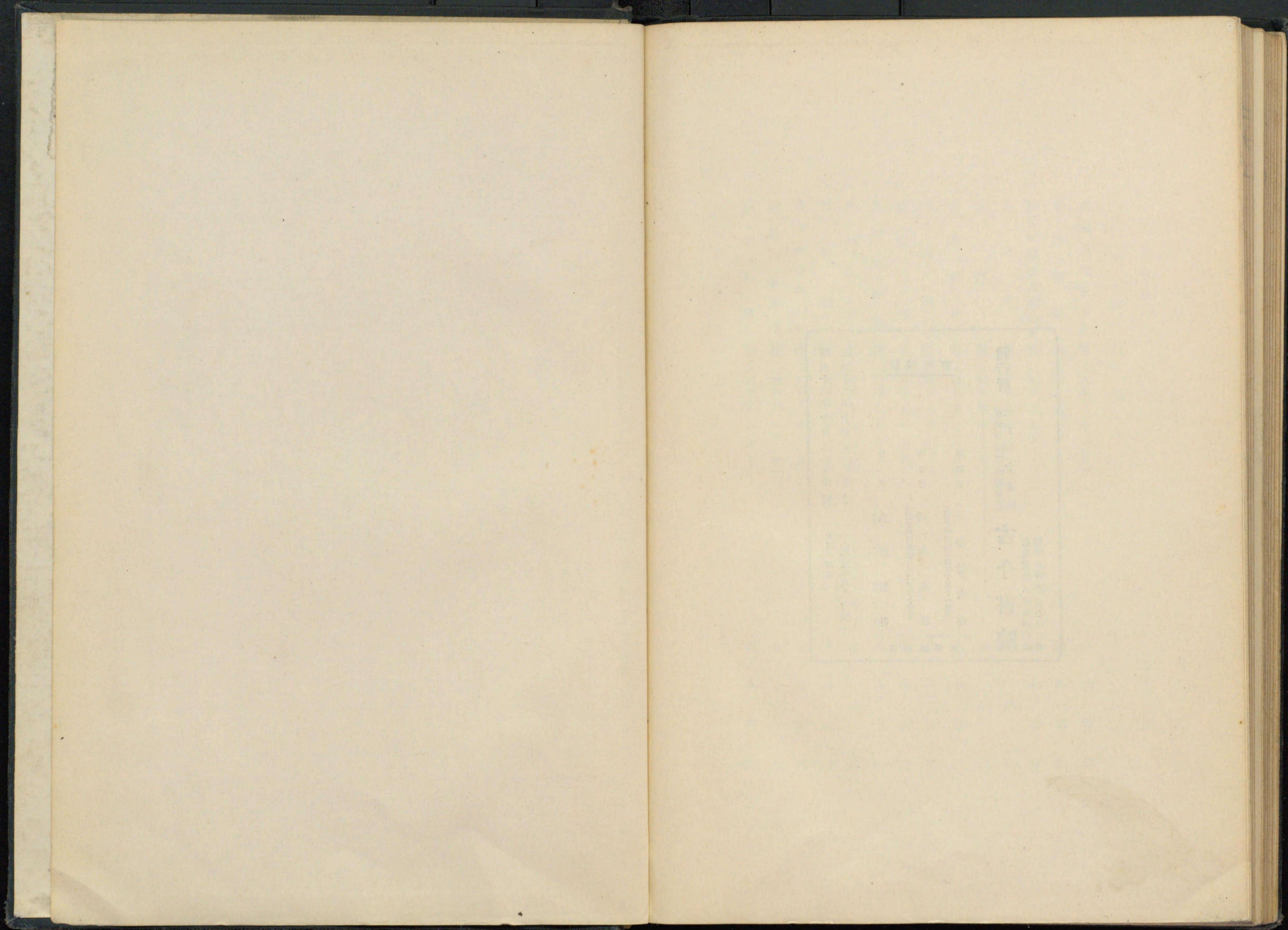
さういふ鍛錬道が、また容さざる心としてあらはれた。

末梢と中樞との關係。

子規先生の自然主義と文學上の自然主義との相違。

とかきつけたのが残つてゐる。「山房漫語」によつて先生の考察をつづけるつもりだつたやうだ。中止した理由はわからないが、丁度その頃「繪畫に於ける線の研究」をまとめる方に力を入れて居たから、或はそれがすんでからなどと思つたのかもしれない。「先生の在世中は、久保田先生といつて、決して島木先生とは言はなかつた。しかし今日では久保田先生とは、郷里の人達と語る時にいふのみで、一般には島木先生といひ、家庭でさへも島木先生といふ事がある。久保田俊彦は戸籍上の名である。島木赤彦は文學上の名である。戸籍の名は文學の名に覆はれる。久保田俊彦を島木赤彦といふのでなくて、島木赤彦が實は久保田俊彦であるといふやうに言はれる時も来るであらう」と、私はこの頃隨筆「背後」の中に書いた。それから其等の文中にある「河西」は、私の前姓である。戸籍上は金原きんはらになつてからも猶、友人も先生も私を河西と呼びつづけ、三年たつて第一の著述が出るにあつて、金原と改めた。こんなことも此處に書きつけて小註とする。

家の前の草原には、もう芒の穂が出て、草の葉は黄味を持つて來た。秋も近いのであらうか、夜は蚊帳に來て蟲が鳴いたりする。日中は中中あつく、頭がぼつとする程の時もある。この春、外國の留學生がもつて來てくれた天目釉の瓶に入つた酒がある。口にひびく強い酒であるが、これを口にふくめば、つかれを忘れる。酒に親しまぬ私が、かうしてこの夏は、この酒をふくみて暑さを送つた。これがこの部屋でまとめる第八冊目の著述である。(昭和十二年八月二十三日、東京市杉並區井荻三丁目九拾番地にて記す)



739
7

12年 / 2月 / 10日 274

閱覽濟

10.4

